トマス・ホッブズの初期政治思想
― 自然法・情念・国家 ―（2・完）

山　本　隆　基*

目　　次

（1）　はじめに－本稿の課題－
（2）　ルネサンス政治思潮とホッブズ
　①　ルネサンス政治思潮における自然法・情念・国家
　②　ホッブズとルネサンス人との接触
（3）初期ホッブズの政治思想
　①　ルネサンス政治思潮の受容とツキディデスとの邂逅
　②　人間の情念－政治思想の前提－（以上，本誌，第 57 巻第 1 号）
　③　教会と国家－宗教思想との関連において－
　④　統治者論
　⑤　政体論
　⑥　国王・議会両陣営の対立と初期ホッブズの政治思想
（4）むすび－本稿の総括と後期ホッブズへの若干の展望－
（附録）初期ホッブズ研究文献目録（以上，本号）

（3）初期ホッブズの政治思想

③　教会と国家－宗教思想との関連において－

---

* 福岡大学法学部名誉教授

先ず，前項までの大略と本項の課題について述べる。初期ホッブズの政治思想は，母国，イングランドの内外における17世紀初頭の政治情勢の展開，特に，国王陣営と議会陣営の対立を歴史的背景として，マキャヴェリからベーコンに至るルネサンス政治思潮の影響を受けて形成された。彼はイングランド内外の緊迫した政治情勢に直面して，アリストテレス・アキナス流の伝統的自然法思想の立場を継受して，イングランド国家の秩序・平和・安全を如何に構築していくかという問題と取り組んだ。その際，ホッブズは，先ず，古代以降の政治的歴史学，特に，その源流の位置を占めているツキディデスが著した『戦史』の翻訳作業の遂行を通して，如上の緊迫した戦争状態の根本原因が極めて深刻な人間情念の作用・働きに拠る次第を確認した。次いで，ホッブズは，斯様な現実分析を踏まえて，情念の奔流が生み出しているイングランド国家の分裂と対立を克服し，秩序・安全・平和を実現して行く方途，自然法の理想へ接近して行く方途を模索する作業に立ち向かう。この点に関しても，既に先行のルネサンス人たちは，その作業を担う中心的主体を，旧教・新教の別を問わず，宗教的な教会勢力にではなく，絶対主義国家の勃興を歴史背景として，統一・主権国家の為政者に求めていた。彼らは，自然法の実現へ接近して行く方途を，哲学者・神学者が説き立てる教条的な戒律・教義ではなくて，政治的世界の担い手たる国家統治者の政治力に求めていたのである。ホッブズも亦，斯様な見地を受け，自然法の実現の試みを，如何なる教会勢力にも期待せず，新興の統一・集権国家の統治者に期待したのである。彼はその点について，必ずしも，直接には語っていないが，「序文群」を中心とする初期ホッブズの資料集の中に，その趣旨を確認することは可能である[(1)]。

先に，ホッブズが，『戦史』の冒頭に付した「序文群」の中の「キャヴェンディッシュ卿への献辞」において，ルネサンス思潮を受けて，現世における最も有用な学問として，「歴史学と道徳・政治学」を挙げた次第を紹介し

た。ここで，その個所の触りの部分をもう一度，引用する。

「・・・父君のご邸宅に勝って，大学なるものを必要としない邸宅を構えた者はおりません。と申しますのは，父君のご研究の大部分は，偉大な人物が労苦と時間を費やすに最も相応しい学問，つまり，歴史学と道徳・政治学 civil knowledge に捧げられ・・・(2)」

ここで，ホッブズは，国家の統治に任ずる「偉大な人物」が，最も必要とする学問が歴史学と道徳・政治学である旨を指摘している。過去の人間の精神活動や国家の出来事を描写する歴史学は，当今の人間や国家の在り方如何を究明する道徳・政治学にとって，貴重かつ必須の素材を提供する。過去の人間や国家に関する事績を探る歴史学は，当今の道徳・政治学の構築のための必須の手段であるという訳である。しかし，その際，歴史学は，あくまでも手段であって，その目的は当代の問題の解決に資する道徳・政治学の構築である点を看過してはならない。ホッブズにとって最重要な学問は，正に，道徳・政治学であった。そして，道徳・政治学が，考究の対象とするものは，統治者と国民からなる国家の現実や理想の観察と構想である。斯様にして，ホッブズは上の引用文で，政治世界を統べる国家並びにその統治者こそが，17 世紀イングランドに統一・平和・安全を確立して行く上で最も重要な主体である旨を主張したのである。そして，ホッブズは，彼が奉職したキャヴェンディッシュ家が，斯様な時代の要請に応えるに十分な物的・人的な条件を備えていると見た。キャヴェンディシュ家の家風の称揚は，実は，同家奉職以前に過ごしたオックスフォード大学の学風に対する批判的な眼差しと対になっている。道徳・政治学の称揚の裏面には，大学・教会勢力の神学・教義学 ecclesiastical knowledge の無効性に対する批判の意図が込められていた。ホッブズも，ルネサンス人と同様に，人間社会の現実と自然法の理想を媒介し，後者の実現に資するものは，最早，神学や戒律の担い手たる教会勢力ではなくて，統一・集権国家の統治者である旨を主張したのである。サクソンハウスは，『余暇』の「タキトゥスの冒頭の部分についての考

察」に拠るものではあるけれども，ホッブズとマキャヴェリの類似性について，両者が，「政治秩序は神的努力 divine efforts ではなく，人間的 human 努力の結果として生まれてくる(3)」という見地に立っていた点を指摘している。既述の様に，この書物はルネサンス思潮に立つものだから，ホッブズの翻訳書の「序文群」との間に共通性があるのは当然である。但し，divine efforts は ecclesiastical efforts と表現した方が，ホッブズの真意に適うと考えるのであるが。

初期ホッブズが，政治秩序の確立の主体を，宗教・教会勢力ではなく，政治的国家の統治者に求めたことを示すもう一つの事例を取り上げてみる。17 世紀前半期のイングランドの重要な外交問題として，ドイツ 30 年戦争（1618-1648 年）への関わり方如何と言う問題があった。周知の如く，30 年戦争は，ドイツ国内の新・旧両教の諸勢力の対立に，スペイン，スウェーデン，フランスなどヨーロッパ諸列強が介入して展開され，事実上，「最初のヨーロッパ大戦(4)」の様相を呈するに至った。この戦争の発端となったのが，カルヴァン派プロテスタントのプファルツ選帝侯とカソリック教徒の神聖ローマ皇帝の宗教対立であった。イングランドにおいても，プファルツ問題の勃発・展開に伴い，上記のいずれの陣営に加担すべきかを巡って議論が沸騰した(5)。ホッブズは，この問題に直接的に関係する文章は何も残していない。しかし，かつて，テンニースは，メーソン Robert Mason なる人物のホッブズ宛ての書簡（1622 年）を公刊し，その中にプファルツ問題に関する言及がある所から，ホッブズもまた，この問題に関心を持っていたと指摘した(6)。そして，近年になってマルコムは，ホッブズ関連の手稿群の探索作業の結果，ホッブズが，1627 年頃，30 年戦争の渦中で書かれたラテン語の文書，Altera secretissima instructio を英訳していた次第を明らかにした。彼はこの手稿を，初期ホッブズに関する新資料として，大部の解説文を付して公刊した(7)。彼はその中で，「イングランドの世論は，1620 年代を通して，

プファルツ選帝侯問題に常時，関心を抱き，時には熱中した[8]」と指摘している。マルカムに拠れば，キャヴェンディッシュもホッブズも，宗教的立場は反カルヴァン主義であり，反カソリック主義であった。しかし，彼らにとって，この問題は，最早，「宗教」問題ではなくて，「国家理性」，つまり，イングランド国家の利益の観点から考究されるべき問題であった[9]。国家理性論は，人々の最高の価値が，国家の世俗的利益の亢進にあると主張するものであり，その見地は，宗教的価値を至上のものと高唱する教会勢力に対抗して出現したものである。ホッブズは，プロテスタントとカソリックの宗教戦争の観点ではなく，イングランドの国家利益の立場から，このラテン語論説の英訳を試みたのである。ここにも，ホッブズの国家中心主義的思想が表れていると見ることが出来る。ちなみに，このラテン語論説は，国家理性論の観点から，プファルツ選帝侯に対して，宗教を変更することを勧めている[10]。また，マルカムは，ホッブズのラテン語論説の英訳作業に見られた教会から国家への価値関心の移行が，ツキディデス翻訳作業において継承されていると指摘している[11][12]。なお，プファルツ問題に関するホッブズの具体的・政策的対応については，後段で取り上げる。

それでは，ホッブズの国家構想において，キリスト教会は如何なる位置づけが与えられているのか。ホッブズの「序文群」の中には，この点に関しても彼の見解が直截に表明されてはいない。しかし，人間の情念が生み出す戦争状態の克服の試み，自然法実現への接近の試みは，教会勢力の力では不可能と見做され，挙げて，政治的国家の働きに期待されるのであるから，教会は政治的国家の目的・機能に適う限りにおいて存在と活動が認められるということにならざるを得ない。彼は，この点についても，ルネサンス人の見地を受け継いでいるのである[13]。シュトラウスは教会と国家の斯様な関係について次の様に説明している。

「・・・ホッブズは，最も早い時期の叙述においては，いまだ英国国教会の監督制主義に比較的（傍点は筆者）近い立場にある。しかし，かれは当時においてもそれ以後と同様に，敬虔なキリスト教徒とはとてもいえなかった。ただもろもろの政治的な考慮だけが，おそらくかれをして，監督制的教会制度を支持しようと決意させた・・・実定的宗教に対するホッブズの本音の立場は，全ての時期を通じて同一であった。宗教は国家に仕えるべきであり，宗教はそれが国家に利益を与えるか損害を与えるかに応じて，評価され或いは非難されるべきである。[14]」

同様に，テンニースも，初期ホッブズは，「確かに，プロテスタント陣営の人物ではあったが，決してピューリタンではなかった」と述べている[15]。サクソンハウスもまた，ホッブズが，「宗教というものを，知識を得る手段と謂うよりも，政治的道具として扱った[16]」と述べている。

以上，ホッブズは，ルネサンス思想を継承して，イングランドにおける秩序と平和の建設＝自然法の実現の担い手を，最早，哲学者・神学者が拠る教会勢力にではなく，政治的統治者が担うイングランド国家に期待することになった。次に，ホッブズの斯様な見地を，更に確証するために，宗教思想の側面からその根拠について説明して見たい。その際，「序文群」の「ツキディデスの生涯と歴史」の中から二つの文章を素材として取り出してみることにする。

先ず，既述の様にホッブズは，ツキディデスの『戦史』を以て，「歴史を叙述する働きは最高度に達した[17]」と述べ，彼を「最高の政治的歴史家[18]」として称揚した。ホッブズは『戦史』こそ，17世紀初頭の段で，イングランド政治を理解しその展望を試みるに際して，必須の書物であると見たのである。そして彼は，前者の文章の直後に，「この使命を正しくかつ完全に成し遂げた者は，単なる人間世界に限って言えばmerely human，この著者の書物を除いて他にはありません。[19]」という文章を挿入している。私は，この言い回しの中に，秩序形成の主役を，従来の教会勢力に代って，新興の政治的国家に期待する次第の宗教思想的な根拠づけを読み取ることが可

能であると思う。その理由は，以下の通りである。「単なる人間世界に限って言えば」という言葉は，超絶的な神の世界，そして，その現世での顕現としての聖書との比較を踏まえて吐かれている[20]。人間の世界は神＝聖書の世界と隔絶している。ところで，教会勢力も生身の人間によってなる此の現世・地上の存在物であり，神＝聖書の世界に属するものではない。崇高な理想世界たる神＝聖書の世界と現世の教会勢力は，同一のものではない。だから，教会勢力が説き立てる戒律や教義の体系は，後者ではなくて前者の世界に属するものである。ホッブズは，斯様な見地に基づいて，現世的な教会勢力と超絶的な神＝聖書の二つの世界の切断を企図したのである。かくして，教会勢力の教義・戒律とルネサンス人の政治的歴史が同質的な人間世界なる土俵で比較可能となる。『戦史』の世界と教義・戒律の世界の比較が可能となるのである。その上で，ホッブズは，前者，つまり，「この著者の書物」が後者に勝っている旨を表明するのである。つまり，政治的国家を主役とする「この著者の書物」が，教会を主役とする戒律・教義に勝っている次第を説く。神＝聖書の世界に近接しているのは，教会勢力ではなく，むしろ，彼らが異教・世俗の代物と蔑んだ政治的国家であると言うのである。教会勢力による戒律・教義の神聖化は，正に，「愚神礼賛」（エラスムス）の類に過ぎない。ホッブズは，「単なる人間世界に限って言えば」と言い回しを駆使して，神＝聖書の超絶性を打ち出すことにより，教会勢力と神＝聖書の世界を分断・峻別し，他方，神＝聖書とツキディデスの世界を，事実上，連結させている[21]。人間世界に属するツキディデスの書物が，事実上，神＝聖書の世界に適う内実を備えている次第が説かれているのである。ホッブズが，この翻訳が「神を喜ばせ，・・・神が恵んだ立派な生活・・・[22]」と書く根拠がここにあった。斯様にして，ホッブズは，現世で自然法の実現に接近して行く手立てとして，教会でなく国家に期待することになるのである。

次に，ホッブズにおける国家の教会に対する優位の主張を基礎づける宗

教思想を見るために，もう一つ，次の文章を，長文で恐縮であるが，取り上げてみたい。

「彼（ツキディデス－筆者）が・・・哲学の学習で得たものは，彼の高貴な出自に相応しいものであった。と言うのは，哲学の分野で，彼は，（ペリクレスとソクラテスと同様に），アナクサゴラスの弟子であった。アナクサゴラスの持論 opinions は，民衆 the vulger の理解の及ばないものであったから，彼は無神論者であるという評判が生まれた。民衆は自分たちの宗教を，自分たちと違って，途方もない ridiculous ものと考える凡ての人達を無神論者と呼んだのであるが，この呼称が結局，アナクサゴラスを死に追いやることになった。そして，ソクラテスも，彼の後，同じ理由で同じ運命を辿った。従って，アナクサゴラスの此のもう一人の弟子（ツキディデス－筆者）が，誰かによって無神論者という烙印を押されたとしても，それほど驚くべきことではない。と言うのは，彼は無神論者ではなかったが，他ならぬ，彼がこれらの異教徒宗教の中にしかと見出した自然的理性の光 the light of natural reason によって，彼がそれ（民衆の途方もない宗教－筆者）を空虚な迷信と見做したことは考えられないことではないからである。そのことは，彼が無神論者であるという民衆の評判を生み出すに十分であった。彼は史書の中で，神託のあいまいさ equivocation を指摘していることもあるが，この戦争の最中では，自分の主張を神託の予言で確かめている。彼はニキアスが民衆の宗教の様々の儀式をあまりにも厳格に守りすぎていると非難している。もっとも，この非難は，そのために彼が，自分自身と自分の軍隊，さらには，自分の国の全領土 domonion と自由をも放棄した時のものである。他方，彼は別の箇所では，ニキアスが神々を崇拝していることを讃え，それ故に，彼が蒙ったような途轍もない惨劇は，誰よりも相応しくないと言うのである。このような訳で，ツキディデスは，彼の叙述において，一面では，迷信家でなく，他面では，無神論者ではないということが明らかになるのである。(23)」

この文章は，ホッブズがツキディデスの宗教性について説明している箇所である。しかし，シュラッター，田中秀夫，そしてマーチニッチらが指摘する様に，ここにホッブズ自身の宗教観も披歴されていると見ることが出来る(24)。ホッブズは，ツキディデスは哲学・宗教思想の面では，小アジアのイオニア出身の思想家，アナクサゴラス（前 500-428 年）の弟子であった述べている(25)(26)。イオニア地域はギリシア人の積極的な植民活動による都市形成と貿易活動の展開を背景に，「イオニア的合理主義」の思潮を生み出した

が，アナクサゴラスは，タレス，アナクシメネス，ヘラクレイトスなどと並ぶその代表的人物であった。彼は，紀元前 480 年のサラミスの海戦後，アテネに移住し，ペリクレス，ソクラテス，そして，ツキディデスたちの思想に影響を与えたのである。さらに，その作品，「メデイア」をホッブズが若年の折，ラテン語訳した悲劇作家，エウリピデスも同類の人物であるとされている[(27)]。アナクサゴラスは，万物の根源的な本質・実体を「ヌウ（理性）」に求め，人間の「自然的理性の光[(28)]」によって，民衆の間に行われてきた伝統的な神託・占い・呪術・習俗などを，迷信であると批判するとともに，人間理性の能力で以て，自然界の神秘性は解き明かされると主張した。そして遂に，太陽神ヘリオスの神秘性を暴きだし，「太陽は灼熱した石塊である」と喝破して，その神秘性を剥ぎ取った。そのために彼は無神論者と糾弾され不敬罪の罪に問われたのである。次にホッブズは，アテネ民衆によって死に追いやられたソクラテスについて，「同じ理由で同じ運命を辿った」と述べている[(29)]。そして，さらに，ツキディデスもアナクサゴラスやソクラテスの二人の「異教徒の宗教」に学んで，民衆の間に行われて来た「途方もない」宗教信仰－伝承・英雄伝・秘儀－を「自然的理性の光」によって批判し，それを「空虚な迷信」であると糾弾するに至る。ここで，ツキディデスが歴史を編むに際して，「歴史の魂」として「真実性」の契機を殊更，重視した次第を，改めて想起されたい[(30)]。そのために，彼もまた民衆から，無神論者の烙印を押されたのである。しかしながらホッブズは，上記の三者が，人間の自然的力能に拠って民衆宗教の迷信性を批判した点を評価すると共に，その批判を以て，これらの三者が．無神論者とはいえない点を強調している。『戦史』のなかで，無神論者として描出されているのは，ソフィストである。この書物には，随所で，ソフィスト的な風潮の瀰漫が批判的に描かれている。例えば，アテネ疫病の大流行の際の民衆の精神的退廃の傾向の描写は，その代表的なものの一つである[(31)]。ホッブズは，上の引用文で，

ツキディデスが無神論者でも迷信家でもなかった証拠として，ギリシア宗教の象徴とも言うべきデルポイの神託に関する彼の態度について書いている。ツキディデスのデルポイ神託に対する態度は，それに対する加重な崇拝を排すると共に，それに対する蔑視をも戒めて適切な対応を求める呈のものであった[(32)]。その態度は，人間の「自然的理性の光」によって，その採択の是非を確認する呈のものであったと言えよう[(33)]。ホッブズは，ツキディデスのデルポイ神託に対する姿勢の中に，無神論と迷信論の両者を免れた真の宗教性を見出しているのである。ホッブズはツキディデスの中に，そして，ツキディデスはアナクサゴラスの中に，つまり両者ともに，異教徒の教説の中に，真の宗教性を見出したのである。ただ，その際，ホッブズの宗教はキリスト教であり，ツキディデスのそれはキリスト教誕生の以前のギリシア宗教であったという違いには留意しなければならない。その上で，上段のホッブズの宗教性の考察に引照して見ると，この段の民衆勢力の占い・伝承・習俗などの迷信性に対する批判は，上段の教会勢力の戒律・教義に対する批判に相当し，この段のアナクサゴラスやツキディデスの「自然的理性の光」の称揚は，上段のルネサンス人やホッブズの歴史学と道徳・政治学の称揚に相当し，この段の宇宙・自然観は上段のキリスト教の神観に相当していると読み取ることが可能である。かくして，本段の引用文も，上段の趣旨と同様に，教会勢力と神的世界を切り離し，歴史学と道徳・政治学を神的世界に適うものと主張することによって，結局，国家の教会に対する優位性を説くものとして読み替えることが可能であると考える。ホッブズは，宗教国家を否定し，国家宗教でなくてはならないと主張したのである。

④　統治者論

前項において，初期のホッブズが，ルネサンス思潮の見地を継承して，情

念の噴出が産み出す対立と混乱の状態を克服し，秩序と平和の確立，つまり，自然法世界への接近のために，在来のキリスト教会ではなく，新興の統一・集権国家の活動に期待するに至った次第を説明した。そこで，次に，彼が，如何様の国家が，この期待に適うものと考えたのかについて考察してみたい。その点に関しても，彼は先行のルネサンス人たちと同様に，国家統治の担い手の資質如何を問う統治者論と，政治体制の態様如何を問う政体論の二つの問題を取り上げている。彼の国家思想も，人治論と法治論の二つの側面を持ち，両者が一体となって構成されているのである。

先ず，統治者論を見る。ここでは，統治者の精神的資質の如何が問題とされるから，前段の情念論の項へ立ち帰ってみる必要がある。該当箇所の引用文をもう一度読み返してみると，ホッブズは，ペロポネソス戦争期，並びに17世紀初頭のイングランドの国家成員について，三層の区分けをしている。一つ目は，彼が，people，multitude，そして，the vulgar などの言葉で表現している民衆階層である[(34)]。ホッブズは，彼らを情念の激流に感けて判断・行動する階層であると批判的に理解していた。該当箇所を一点だけ繰り返し引いておく。「・・・彼ら（民衆－筆者）の意見 opinion は，彼ら自身の権力と彼らが企てるどの様な謀も実現させる能力を買い被るものであり・・・（アテネ国家の－筆者）大いなる繁栄－彼らは，今や，多年に亘って，それに浸って来ていた－は虚栄心 vanity に駆り立てるものだ。そして，誰にとっても，虚栄心を傷つけるような類の助言を進んで受け入れることは困難である。[(35)]」彼らは，統治者階層としては相応しくないと理解されたのである。次に，二つ目のタイプは，民衆の情念に阿ね，民衆の情念を扇動・操作する rhetorician や speaker などと称されているデマゴーグ demagogue の類の政治家である[(36)]。彼らは，虚栄心，党派心，そして野心などの心中の情念を満たすために蠢く面々である。ホッブズは，その有様をツキディデスに拠って次の様に描出していた。「（ツキディデスは－筆者）随

所で，知恵者という評判と栄誉 reputation and glory を求めるデマゴーグ達の対立と抗争を指摘している。彼らの間で諍いが生まれて国家 the public に損害を及ぼした。[37]」先述の様に，ホッブズが斯様なタイプの典型として厳しく糾弾したのはクレオン（前 470 頃－前 422）であった[38]。『戦史』の中では，クレオンの他に，シケリア島遠征を無謀にも推進したアルキビアデス（前 450 －前 404）やスパルタ陣営のシケリア島シュラクサイの「民衆派の領袖」であったアテナゴラスがこの部類に該当する人物として登場している[39][40]。以上で取り上げた民衆勢力とデマゴーグ連は，結託してアテネの混乱・崩壊を齎したものと見做された。ホッブズは，ペロポネソス半島の西南端で展開されたピュロス会戦に際してのクレオンの演説の行に脚注を付して，「クレオンの扇動に拠るアテネ民衆の不遜な要求 the insolent demand of the people of Atheans by the advice of Cleon」と評している[41]。彼らは政治的指導者としての資質を欠く者とされたわけである。しかし，その次第は，彼が，民衆勢力とデマゴーグの結託が，政治過程の帰趨に果たす役割が軽度であると見做していたことを，意味するものではない。ツキディデスは，『戦史』のメロス島対話やシケリア遠征などの記述で，民衆勢力とデマゴーグの動向こそが，アテネ国家の分裂と敗北を齎した原因である次第を活写した。ホッブズも 17 世紀初頭のイングランドにおいて，民衆勢力が議会陣営と結託して，王政批判を展開している状況をアテネ国家の運命の再現として危惧の念を深めていたのである。統治者には，斯様な連合体を首尾よくコントロールして行く力能が期待されることになるのである[42]。

かくして，ホッブズが統治者の資質を持つとして推奨するのは，三つ目のタイプの人々ということになる。ホッブズはこの人々を，色々の言い回しで表現している。「分別を持つ人 a man of understanding [43]」，「賢明な人々 wise men [44]」，「少数の秀でた人々 few and better sort [45]」，「優れた分別と教育を持った人々 men of good judgement and education [46]」などであ

る。ホッブズは，それらを纏めて，「高尚な人 nobleman」と呼び，彼らこそが「偉大且つ重要な行為の処理に携わる」に相応しいと言っている(47)。それでは，ホッブズが彼らの中に見出した，或いは期待した理想的政治家の資質とは如何なるものであったのか。その点に関して，彼はお互いに関連する知性，政治性，徳性の三点を挙げていると思う。先ず，知性を備えた人間であることが要求される。ホッブズは彼らに『戦史』に親しむことを勧めたのであるが，その理由について次の様に書いている。「歴史学の重要かつ固有の任務は，過去の行為に関する知識によって，現在においては思慮深く prudently，将来においては先見の明を以て providently 振る舞うことを教え，可能とすることである。(48)」ホッブズは，当代の統治者として期待する人々に，歴史上の優れた為政者の統治の方法・実績を学習すること，つまり，斯様な実践知・経験知の蓄積を通して，当面の治政においては思慮性を，将来の治政計画においては先見性を発揮する呈の力能を磨きあげることを要請している。歴史に学び，短期的な戦術論と長期的な戦略論をきちんと構築し，それを実地に遂行し得る力量を獲得することを期待しているのである。マルカムは，思慮とは，「あらゆる統治行動に，原則として適用できる実践的判断」あるいは，「分別力，判断力，そして，経験から獲得される呈の技術」であると説明している(49)。斯様な見地は，ルネサンス人，特に，リプシウスによって強調されたところである。J. バルヌは，「思慮は，ルネサンスの多くの政治思想家のテーマであった。人は，例えば，ホッブズとユストゥス・リプシウスとの間の一致を認める事が出来る(50)」と述べている。佐々木毅も，そのリプシウス論の中で，ルネサンスの人文主義思潮思潮において，「思慮の地位が上昇して(51)」行ったと指摘している。

次に，ホッブズは優れた統治者の二番目の資質として，政治性を挙げていると考える。ホッブズは，先述の様に，ツキディデスに拠って，アテネの民衆やデマゴーグの情念の奔流が，その政治過程に巨大の比重を占めていた次

第を学び，17 世紀初頭のイングランドがその轍を踏む危機に直面していると認識していた。だから，彼らが作り出す国内の分裂・混乱，あるいは無謀な対外侵攻の企てを牽制・統御して行くためには，高度の政治技術と実行力を具備した指導者が必要であると考えたはずである。従って，統治者は，民衆やデマゴーグの情念の赴くところを的確に理解し，それをきちんと統制すべく対処して行かなくてはならない。また，統治者は，自国と他国の経済・軍事力を冷静且つ正確に理解して対外政策を進めなければならない。シケリア遠征を無謀にも敢行したアテネのデマゴーグの轍を踏んではならない。ここで，『戦史』の中で，アテネの統治者，ペリクレス（前 495 頃 - 前 429）の民衆統治の巧妙さが描出されている一節を引いておきたい。彼は，ペロポネソス戦争の最初期，スパルタ陣営が，アッティカ地域へ侵入しアテネに迫った時，民衆の血気にはやる強硬な出撃論を巧みに戒めた。

「ポリスはあらゆる所で蜂の巣を突いた騒ぎを演じ，ペリクレースにたいする怒りをつのらせた。・・・しかしペリクレースは，かれらが現状にたいする憤懣のあまり良識を失しているのを見ると，出撃を禁じた自分の判断が正しいことを確信していたので，民議会も非公式の集会も開こうとしなかった。市民らが政策によらず激情によって一群となったとき，かれらが犯すやも知れぬ致命的な過失を未然に防ぐためであった。かれはポリスの警備を厳重におこなわしめ，できうる限り人心を平静に復することに力をもちいた。(52)」

ペリクレスは自陣営とスパルタ陣営の彼我の戦力をきちんと分析し，アテネ民衆の「激情」の赴くところを冷静に認識して危機に対応した。彼はアテネ国家の利益の確保と言う大局的判断に基づいて，民議会を一時的に停止し，非常時独裁的な技術を駆使したのである。ツキディデスは，そしてホッブズもまた，斯様な政治技術を巧みに駆使したペリクレスの政治性を高く評価しているのである。

三番目に，ホッブズは統治者の資質として，徳性において優れている点を挙げていると考えられる。佐々木毅は，リプシウス論の中で，「思慮は徳

から離れるならば狡智に転落する以上，思慮を有するためには徳を必要とする。[53]」と指摘している。また，マイネッケは，16世紀半ばに生まれたルネサンス人の「国家理性」観について次のような説明を行っている。

「各国家は自己の利益という利己主義によって駆りたてられ，ほかの一切の動機を容赦なく沈黙させる，という一般的な規則から生ずるものである。しかしそのさい同時に，『国家理性』は，つねにただ，適切に理解された利益，つまり，貪欲の本能から浄化された合理的な利益のみを意味する，ということは，暗黙のうちに，本質的な前提とみなされている。[54]」

見られる様に，ルネサンス人の「国家理性」論は，統治者の資質として，徳性の具備を求めているのである。ホッブズも，「キャヴェンディッシュ卿への献辞」のなかで，彼が仕えた第二代デヴォンシャー伯爵が国政の場において，「党派心」や「野心」といった「貪欲の本能」から自由に，専ら，「公共善 public good」＝「国家 country の利益」のために活動した次第を称賛している[55]。またホッブズは，一時，アテネ軍の指揮官として活動した経歴を持つツキディデスも，同様の資質を備えた人物として描いている。彼は「卑屈な著述家」から「自国に悪意を持っていた」と批判されたが，「そのように扱うことが彼らには相応しかった」のだ[56]。彼は，「アテネ国民 Athenians としての彼らの不名誉になることは書かなかった。ただ民衆 *people* としての彼らの不名誉になることを・・・叙述の必要から書いただけである[57]」もし彼が追放の憂き目にあわなかったら，徳性を備えた優れた政治家として活躍できたはずである。ホッブズは，民衆やデマゴーグの様に，情念の働きがその人の行動に「最大の影響力 greatest sway[58]」を発揮している類の者は，統治者の資質を欠く者と考えていたのである。このようにして，ホッブズの思想にも，人治思想＝徳治思想の要素が皆無であるというわけではなくて，統治者が民衆を教化していくという働きも期待されていたと考えられるのである。

以上の様に，ホッブズは，国家の統治者は，自国に秩序と平和を樹立・維

持すべく「穏健且つ慎重[59]」な内外政策を立案・実行して行くためには，知性・政治性・徳性の三点に優れた資質を備えていることが必要であると考えた。彼は斯様な形で望ましき統治者の謂わば，理念型を提示したのである。そして，ホッブズは，「序文群」の中で，斯様な基準に適う人物として数人の名前を挙げている。先ずは，これまで屡，取り上げて来たホッブズの主，第二代デヴォンシャー伯爵が挙げられる。次に彼が称賛するアテネの政治家・軍人として，ペイシストラトス，ペリクレス，ニキアス，そして，シケリア島はシュラクサイの政治家・軍人としてヘルモクラテスがいる。ペイストラトス（？－前527）は，ペロポネソス戦争期よりも一世紀前に出現した僭主であった。ホッブズによれば，ツキディデスは，彼が僭主であった点は批判したが，その統治実績については高く評価した[60]。しかし，私は，『戦史』の中に，ペイシスラトスに関する記述を四箇所，確認したのであるが，そこには，特別に，彼の統治を称賛する文言を見出すことは出来なかった[61]。私は，ペイシストラトスの称揚の個所は，ホッブズが自分の見方を挿入したのではないかと思う。彼はペイシストラトスが，武力を以て僭主政を布いた点は批判したが，彼の施した統治の実績を高く評価したのである[62]。ペリクレスについては，上段でも言及した。ツキディデスは，また，「かれ（ペリクレス－筆者）は当時のアテーナイでは第一人者と目され，弁舌・実行の両面においてならびない能力をもつ人物であった[63]」と称揚している。それに対して，翻訳者，久保正彰の注釈を借りると，ペリクレス以後の政治家には，「大局を眺観した上での計画性，およびそれを実現させる正道に立った政治力」が欠けていた[64]。ホッブズはペリクレスの統治の時期に，「アテネは最強であった」と注釈している[65]。『戦史』は，ペリクレスの治政を統治の理想型として冒頭の部分に配置し，それ以降の部分で，クレオンやアルキビアデスらのデマゴーグの出現によるアテネ政治の堕落・衰退を描いた作品として読むことが出来る。しかし，その中にあっても，ホッ

ブズやツキディデスが評価する人物として，既出のニキアスが挙げられる。彼は，ペリクレスの死後，クレオンやアルキビアデスとキュティレーネ人の処分やシケリア遠征を巡って対立する意見を吐いた。ツキディデスは「かれの常日頃の言行が一つとして高き徳にそむくところのなかった(66)」旨を指摘している。また，ツキディデスは，スパルタ陣営のシュラクサイのヘルモクラテスをして，ニキアスを，「敵側指揮官の中で最も老練な人間(67)」と言わせている(68)。当のヘモクラテスも亦，ツキディデスが高く評価した人物であった(69)。そして，最後に，ホッブズが評価した政治家・軍人としてのツキディデス本人の名前も追加しておきたい。

以上，ホッブズは17世紀初頭のイングランド国家に期待さるべき統治者像として，ツキディデスの『戦史』から学びつつ，知性・政治性・徳性に秀でた「高尚な人々」の階層の統治に期待することになった。また，彼はクレオンらのデマゴーグの統治様式を半面教師として生かしながら，ペリクレスやニキアスの統治行動の中に，その具体的顕現を見出していったのである。そして，風雲急を告げる17世紀初頭イングランド国家を救う上記の力能を具備した統治者，謂わば，第二のペイクレスの出現を期待したのである(70)。

⑤　政体論

ホッブズは，ルネサンス思潮を受けて，人間の情念が生み出すこの世の分裂・対立・戦乱を収拾し，秩序と平和を確立していく主体を，教会勢力ではなく，政治的指導者が統べる国家に求めた。そして，新興の国家が斯様な目的に資するためには，先ず，国家統治者の精神的資質の如何が重要である旨を唱え，彼らの知性・政治性・徳性の練磨・涵養が必須であると説いた。しかし，ホッブズは同時に，国家統治者の統治行動や統治様式の在り方に影響を及ぼす国家の制度的枠組み如何という問題，つまり政体如何の問題も重要

であると考えた。彼は政体問題に関して，君主政・貴族政・民主政という古代ギリシア以来の政体区分の観念を用いて論じている。ホッブズは，自然法の理想世界へ歩みを進めるためには，内面的な統治精神の問題と外面的な政治制度の問題，人治の問題と法治の問題の両側面，並びに両者の関連に配慮することが肝要であると考えたのである。

ホッブズが，「序文群」の中で，政体論に関して言及しているのは，次に引用する二か所である。何れも，先の情念論の箇所で既に，取り上げた所であり，その次第自体が情念論・統治者論と政体論が密接な関係を持つことを示している。先ず，一つ目の箇所を引用する。

「国家の政体 the government にする彼（ツキディデス－筆者）の意見に関して見ると，彼が民主政 the democracy を全く嫌っていたことは明らかである。随所で，知恵者という評判と虚栄 reputation and glory を求めるデマゴーグ達の対立と抗争を指摘している。彼らの間で意見の諍いが生まれて国家 the public に損害を及ぼした。演説者の間の目的とする所や弁舌 rhetoric の才の違いによって，諸決議の一貫性が欠けるという事態が生まれた。そして，獲得することを望み，獲得した者を保持したいと望む者たちの追従的助言に基づいて，一般民衆 the common people の中に樹立された権威と権力は無謀な企てに乗り出した。さらに又，彼はどの箇所においても，『少数者 *the few*』の権威を賞賛しているようにも見えない。彼が言うには，それらの面々は，誰もが，長となることを望み，低い評価を受けた者たちが，民主政の場合以上に，その評価に耐えることが出来ずに，反乱を起こして，政府を消滅させてしまう。彼（ツキディデス－筆者）がアテネの政体の中で賞賛するのは，『少数者』と『多数者』の混合から成っていた時である。しかし，彼がもっと more 推奨するのは，ペイシストラトスが支配し（それが簒奪権力 un usurped power であることを別にしてであるが）た時，そして，この戦争の初期に，名目上は民主政でありながら，実際には，ペリクレスの下で君主政が行われた時であった。そして，彼は王家の出であったから，王政 the regal government が最善 best であると考えていたように思われる seemeth。(71)」

次に二つ目の箇所を引用する。

「誰にとっても，自尊心を傷つけるような類の助言を進んで受け入れることは困難である。そして，この次第は，一人の人間においてよりも民衆 multitude の場合の方がはるかに良く

当てはまる。自分一人だけで考える人は，彼の仕事に関する些細な示唆でも，少しでも堅固に備える事が出来るように，受け入れるものである。しかし，民衆の面前における公の審議の場合は，恐怖－それは，殆どの場合，よき助言は与えるが，そのように実行するとは限らない－は，めったに，あるいは，全く，姿を表わさないか，または，受け入れられないからである。[72]」

見られる様に，一つ目の引用文は，『戦史』のなかで開示されているツキディデスの政体論を，ホッブズが整理して紹介を試みたものである。しかし，これまでに述べてきた彼の情念論と統治者論を勘案して見ると，シュトラウスも指摘しているように，ここにはツキディデスの手を借りて彼の政体論が披歴されていると見て差し支えないと思う[73]。そこで，この二つの引用文を併せて基礎素材として用い，これまでの情念論と統治者論の考察も参照しつつ，ホッブズの政体論を，探り出して見ることにする。

二つの引用文を併せて読んでみると，ホッブズが，民衆勢力と貴族勢力の双方の内面に巣くっている情念の力を憂慮して，純粋な形の民主政と貴族政を否認していることは明らかである。優れた政治指導力を発揮したペリクレスの没後のアテネには，彼に匹敵する人物は現れず，純粋形の民主政が出現したが故に，民衆の無謀・無際限の情念が横溢し，また，それを操って自らの虚栄心の充足に奔走したデマゴーグが跋扈した。『戦史』の言葉を借りると，「思い上がった烏合の衆[74]」と相互に「憎悪の念[75]」を募らせたデマゴーグたち，この両者が合体することによって，アテネの分裂・衰退・敗北と言う事態が起こった[76]。ホッブズは，晩年の自叙伝の中でも，「彼（ツキディデス－筆者）コソ我ニ民主政治ノ如何ニ愚劣ナルカヲ，且ツドレホド個人ガ集会 assembly ヨリ賢明ナルカヲ教示セリ[77]」と述べたのである。ホッブズとツキディデスは，民衆の心中における情念の噴出を憂慮して，純粋民主政こそ，衆愚政に堕する最悪の政体であると見做していたのである。ちなみに，先述の様に，ツキディデスとホッブズが，「真実性」に欠ける史

家として厳しく糾弾したヘロドトスは，アテネ民主政に対して高い評価を下している[78]。そして次に，ホッブズは，純粋の貴族政に対しても，厳しい態度を取っている。ツキディデスは，貴族政も統治の任に就いた「少数者」たちの情念の論理が，貴族政の腐敗形態たる寡頭政を招来し，アテネを混乱に陥れたと観察している。彼は前411年，シケリア遠征敗北の煽りを食らって民議会が解体され，四百人評議会が結成された際の状況について次の様に書いている。評議会の面々は，「貴族政治にとっては，正に致命的ともいうべき振る舞いをなそうとしていた。というのは，誰もかれもみな政変当日いらい，互いに対等な立場に甘んじようとはせず，各人とも我こそ他に抜きんでたる第一人者たらん，と抱負をたくましくしたからである。[79]」民衆とデマゴーグの情念の激烈さ故に，純粋形の民主政は衆愚政に堕し，純粋形の貴族政は寡頭政に堕してしまったという訳である。それでは，純粋の形の君主政の場合はどうであろうか。ホッブズは，上の引用文で，ツキディデスは王家の出であるから，王政 the regal monarcy が「最善 best」の政体であると考えていたと見られると言っている[80]。しかし，私は，『戦史』の文中に，それに該当する説明を見出すことが出来なかった。この書物の中で，王政 regal authority と言う言葉が出てくるのは次の箇所である。ツキディデスは，トロイ戦争後，アテネやスパルタの植民活動が活発化し，ギリシア人の勢力が増大し，「物資の獲得」に熱が入ったことに伴って，諸ポリスの政治体制が，改まった次第を次のように書いている。「諸ポリスではいっせいに独裁者が擡頭し，収益はさらに増大した（それまでは世襲の王がある一定の権限を与えれれて統治をおこなっていた）in most of the cities there were erected tyrannies：(for before that time, kingdomes with honours limited were hereditary）[81]」見られる様にこの箇所の記述は，ペロポネソス戦争に先立つギリシア史において，君主政から僭主政へ移行した次第を客観的に記述したものである。其処には，ツキディデスが君主政を「最善」の

政体であると評価した次第を読み取ることは不可能である。ホッブズはこの箇所に脚注を伏して，The difference between tyranny and regal authority と記している。この脚注に同様な評価を読み取ることも出来ない。ホッブズも，上の引用文の末尾で「・・・と見られる・・・seemth」と消極的に表現しているに過ぎない。ホッブズとツキディデスは，三政体の純粋形の中では，君主政が民主政や貴族政に比較すると，好ましい政体と見做していたと思われるが，それを絶対的なものと見做していたとは言えない。純粋形の王政に対する評価は，積極的なものではなく消極的なものであったと見るべきである。だから彼は，ジェームズ一世やフィルマー流の王権神授説（国王主権論・国王親政論）に組することは出来なかったと思われる。彼は，君主政一辺倒の立場ではなかった。かくして，純粋の三政体は何れも，国家の統一と平和（＝自然法）を創出する制度たり得ないと見られたと考える。マキャヴェリも三政体の純粋形を良しとせず（人間の情念を勘案すると），これらの混合から成る政体を推奨した。

「・・・上述のすべての政体は，どれもこれも欠点にみちたものであると，私はあえて言おう。・・・慎重に法律をつくりあげようとするほどの人なら，だれしもこの欠点をよくのみこんでいるので，これらの政体のどれ一つとして，そのままの形で適用することはしない。(82)」

「上述の三つの政体の要素が，すべてそれぞれ所を得ることとなった。・・・かえってそれら三者がまざり合って完全な国家をつくりあげていたのである。(83)」

マキャヴェリは，リプシウスが，先述の様に，ツキディデスの歴史学の後継者と見たポリビウスによる，君主政→僭主政，貴族政→寡頭政，民衆政→衆愚政のそれぞれの堕落形態への移行論を参照して，上の二つの引用文を書いたのである(84)。

他方，ホッブズは，上の引用文で，ツキディデスがアテネに出現した三政体の組み合わせに拠る混合政体を称揚した次第を指摘している。一つは，シケリア遠征敗北の直後に出現した貴族政の崩壊を受けて成立した，民主政と

貴族政の組み合わせから成る混合政体である。ツキディデスは『戦史』の中で，こう書いている。「今や，（少なくとも私の時代においては）初めて，アテネ人たちは自分たちの国家を正しく整えたやに思われる。それは，正に，*少数者*と*多数者*の適度の組み合わせ moderate temper からなっていた。これによってアテネは，数多の災難の後，再び上昇の道を辿り始めた。(85)」そしてホッブズは，英訳書のこの箇所に，脚注を付して，「アテネ人は，四百人評議会を廃止し，五千人会議を設立することにより，自分たちの政府を整備し内乱を収束させた(86)」と述べている。かくして，貴族政と民主政の均衡・融合の政体が生まれたという訳である。しかし，貴族政と民主政の均衡は，君主の優れた政治指導がなければうまく機能して行かない。『戦史』は，ケルキュラの内乱を初め，各都市国家における貴族派と民衆派の内乱を描いている。事実，シケリア遠征後の貴族政と民主政の混合政体は，ツキディデスの叙述にも拘らず，強力な政治指導者を欠いていたために，きちんと機能しなかったのである。もっとも『戦史』は，この混合政体の成立直後の時期までしか書かれていない。此の政体の実際の成り行きについては叙述されていないが，実際には，この混合政体の中で，貴族派と民衆派の対立が再発・亢進して行ったのである(87)。そのような事情であるから，ツキディデスが，「もっと」推奨したのは，既に上段の統治者論の箇所で言及した，紀元前 560 年頃から紀元前 527 年頃に及ぶペイシストラトスの統治である。但し，それが「簒奪権力」，所謂，僭主政であった点を除いてであるが。ペロポネソス戦争の一世紀前の，形式は僭主政であるが，内実は民主政と君主政の混合政体であったと言い得るペイシストラトスの統治が称揚されたのである。同じく「もっと」推奨されているのが，この点についても統治者論の箇所で，言及したところであるが，ペロポネソス戦争の序盤期，民主政下において，ペリクレスの優れた政治指導によって，実質的に君主政が断行された時期である。ツキディデスは，ペリクレスの統治について，

「・・・その名は民主主義と呼ばれたにせよ，実質は秀逸無二の一市民による支配がおこなわれていた[88]」と書いている。私は，『戦史』の叙述を通して，先の統治者論の箇所の説明も合わせて考えてみると，ツキディデスが最も高く評価しているアテネの政治体制は，ペリクレス体制であったと思う。そこでは，実際に君主政・貴族政・民主政の三体制が最もうまく組み合って機能していたのである。ペイシストラトスの政治体制は，ペリクレス体制に準ずるものと見做されているのである。それに対して，シケリア遠征敗北後に出現した貴族政と民主政の混合政体のケースでは，鍵となる王政の契機が欠如している。国家統一を担保する制度として，権力の究極的所在は不可欠のものであった。

ホッブズが，ツキディデス推奨の政体として紹介したこれら三つの事例は，純粋型の政体ではなくて，混合政体であった。ここで，初期ホッブズの思想活動の究極目的が，イングランドに自然法に適う政治秩序を建設するための方途の模索であった次第を想起して見る必要がある。政体論如何の問題は，この究極課題との関わりで考察されることになるのである。ホッブズの政体論は，政体如何そのものを形式的・静態的に問うものではなく，斯様な国家目的を念頭に置いて，国家を担う統治者の精神的資質や現実の政治状況におけるその実際上の機能・結果の如何を勘案して，過程論的・動態的に展開さたのである。たとえば，上述の様に，非常時におけるペリクレスの民議会の緊急停止，つまり，民主政の一時的停止の施策が発揮する積極的な政治効果の意義が高く評価されるのである。同時に，ペリクレスは，『戦史』の前半部分のハイライトと言える周知の戦死者の「葬送演説」において，スパルタの貴族政を意識しつつ，自らが主導するアテネ民主政を称揚したのである。また，また，僭主，ペイシストラトスの統治をホッブズの独自の判断において評価したことは，彼の政体論の基本的構えが，政体の在り方が現実の政治過程において実際に果たす機能を勘案して，最も適切な三類型の組み

合わせを時機に応じて考える点にあったことを示している。ホッブズもマキャヴェリと同様に，何れか一つの純粋形の政体を抽象的に選抜するのではなく，三政体を時機に応じて柔軟に組み合わせる混合政体を推奨したのである。ホッブズは，イングランドに秩序と平和を構築して行くためには，強力な政治指導者を核とする三政体の諸要素の組み合わせからなる混合政体が望ましいと考えたと思われる(89)(90)。

以上，前項と本項で見て来た様に，ホッブズの国家思想は，統治者論と政体論の二つの論点を持ち，前者においては人治の思想，そして後者においては，法治の思想が披歴されたのである。そして彼は，この二つの側面が相まって，人間の情念が生み出す現実世界をコントロールして，自然法の理想世界へ接近して行く道筋が成り得るという展望を開示したのである。その際，望ましき政体とされた混合政体は，強力な政治指導者の存在が必要条件とされていたから，やはり，人治思想の面に力点が置かれていたと見てよいであろう。統治者並びに国民の内面的資質が，基本と考えられていたと思われる。優れた統治者を主導者とする政治体制によって，国民の大多数を占める民衆の教化と国家の統一・秩序・平和の確立が期待されたと見ることが出来る。ホッブズはこの様に，統治者と政体の両分野の宜しきを得ることによって，此の現世の直中に，自然法の理想規範に適う国家の秩序と平安を築いて行き得るという展望を示したのである。

⑥　国王・議会両陣営の対立と初期ホッブズの政治思想

さて，既述のように，ホッブズは，ツキディデスの著書，『戦史』を，史書の魂たる「真実性」と肉体たる「修辞性」の二つの条件を十分に満たし，それ故に最高度の政治的・現実的有用性を備えた「最高の政治的歴史」と賞賛した。だから，以上で考察したホッブズの『戦史』論は，彼が直面した17

世紀初頭のイングランド内外の政治問題への対処のために展開されたものであった。ホッブズの初期時代，イングランドではスチュアート王政に対抗する議会陣営の闘争が発生・展開・亢進して行った。彼がオックスフォード大学へ入学した1603年，チューダー王朝のエリザベス女王が没して，ジェームズ一世が即位した。その時期から，国王陣営と議会陣営の間には，国王と議会の権限問題，独占権・課税権問題，そして，30年戦争との関わり如何の問題を初めとする大陸の宗教改革に端を発する宗教紛争などを巡って軋轢が発生した。議会陣営の主力を構成したピューリタンとコモン・ローヤーは連合戦線を組んで，国王陣営を攻撃した[(91)]。彼が『戦史』の翻訳書を公刊した三年前にはカソリック的な宗教政策を推進した国王陣営のバッキンガム公を弾劾し処刑台へ送った。そして，一年前には，議会陣営はチャールズ一世に対して，宗教・憲法闘争の重要な画期をなす「権利の請願」を提出した。翻訳書の出版年には，ジェームズ一世を継いだチャールズ一世が，議会を停止して親政政治を断行するに至った。ツキディデスは，『戦史』の中で諸ポリスの間の戦闘を描くと同時に，或いは，それにも増して，諸ポリス内部における民衆派と貴族派の対立・内戦を精力的に描出した。ホッブズは議会陣営の国王陣営に対する宗教・憲法闘争を，ペロポネソス戦争下の民衆派の権力奪取の闘争の再来と捉えた。この次第が，彼の時局的問題の理解と判断の在り方に大きな影響を及ぼしている。ジョンソンは，「『戦史』は，直接にホッブズのイングランドに関連を持ったのである。[(92)]」と述べている。

ところで，上段で考察した初期ホッブズの政治思想は，ツキディデスの『戦史』を主たる素材としたものであったが，両者が生きた時代の間には，2000年にも及ぶ隔たりがある。ホッブズが，それにも拘らず，『戦史』の当代的有用性を確信し得た理由は如何様なものであったのか。その点に関して，先ず，ツキディデスの言い分を聞いて見る。彼は，『戦史』の最初の所で，この書物を編む根本動機について，次のように述べている。

「やがて今後展開する（ペロポネソス戦争以降の－筆者）歴史も，人間性のみちびくところふたたびかつての如き，つまりそれと相似た過程を辿るのではないか，と思う人々がふりかえって過去の真相を見凝めようとするとき，私の歴史に価値をみとめてくれればそれで充分であろう。[93]」

また，ツキディデスは，戦争の過程を描く中で，ケルキュラの民衆派と貴族派の内乱に関しても，同様の趣旨を次のように言っている。

「この時生じたごとき実例は，人間の性情が変わらない限り，個々の事件の違いに応じて多少の緩急の差や形態の差こそあれ，未来の歴史にも繰り返されるであろう。[94]」

この二つの文章でツキディデスは，先ず，ペロポネソス戦争の根本原因と理解された「人間性」＝「性情」の在り方は，将来の歴史状況の変動にも拘らず，基本的には不変である旨を説いている。彼が戦争の主因たる人間性の中に見出したのは，虚栄心，野心，党派心などの人間の意識下の世界における情念の躍動であった。それらは，個々の人間を取り囲む歴史環境の推移・変動にも拘らず，人々の行動を根底的に規定して止まないと言っているのである。だから情念の作動に起因する競争・戦争行為は，必ず将来においても出現して来る。そこで，ツキディデスは，人間の情念を鍵観念としてペロポネソス戦争史を描き，「後世のための永遠の富 possesion [95]」を提供しようと試みたのである。斯様なツキディデスに始まる政治的歴史学の境地は，その系譜を受け継いだルネサンス人たちによって継承された[96]。例えば，マキャヴェリは，次の様に指摘している。

「過去や現在の出来事を考えあわせてみれば，たとえ都市や国家を異にしたところで，人々の欲望や性分は，いつの時代でも同じものだということが，たやすく理解できるであろう。したがって，過去の事情をたんねんに検討しようとする人々にとっては，どんな国家でもその将来に起こりそうなことを予見して，古代人が用いた打開策を適用するのはたやすいことであろう。[97]」

ルネサンス人の思潮の影響を受けて思想活動を開始したホッブズも，斯様な境地を共有していた。彼が古代の政治的歴史学，特にツキディデスの歴史学に強烈な関心を寄せた理由がここにあったのである。『戦史』の真実性，修辞性，そして，それらの故の当代的有用性という境地の真底には，人間情念の空間的・時間的な不変性というテーゼが横たわっていたのである。先述の様に，彼が最も有用な学問として，「歴史学と道徳・政治学」の二つの学問分野を併せて取り上げた理由がここにあるのである(98)。

さて，それでは，ホッブズは，ツキディデスの『戦史』から学びつつ，17 世紀初頭の母国における国王陣営と議会陣営の対立の亢進という事態に直面して，いかなる態度を取ったのか。その点に関して，初期ホッブズを論じた者は，ホッブズが国王陣営に組していた次第を指摘している。彼が議会陣営に組したという見方をする者は見当たらない。主だったものを，次に列挙して見る。既に早く，前掲のオーブリーと同時代人の伝記作家，ウッド（Anthony Wood，1632-1695）は，ホッブズの『戦史』翻訳書の公刊の動機は，「民主政アテネの愚行がイングランドにおいても展開される可能性がある」と見たからであると指摘した(99)。次に，初期ホッブズ研究の口火を切ったロバートソンは，ホッブズが議会陣営の指導者，エリオットやピムを，ペロポネソス戦争期のアテネに出現した代表的デマゴーグ，クレオンに見立てたと言っている(100)。ロバートソン以後の論者たちにおいても同様である。例えば，シュラッターーは，「ホッブズは明らかに，ジェームズ一世時代のイングランドを好ましき社会と見做していた。そして，預言者的眼識を以て，歴史から，特にツキディデスから，それもまた崩壊し得るか否かを学ばねばならないと考えた(101)」と指摘している。レイクは，1628 年に議会陣営が国王を攻撃する「権利の請願」を提出したことが，史書の翻訳出版の理由であると言っている(102)。ロゴウは，ホッブズは議会陣営の論客，エリオットとピムの言説に内包されているレトリックに注意を喚起したと指摘し

ている[103]。グローバーは，初期ホッブズとキャヴェンディッシュ家の関わりを念頭において，次の様に言っている。「彼の（ホッブズの－筆者）20 歳台から 40 歳台にかけては，国王絶対主義は，彼が呼吸する大気のようなものであり，彼が食べるパンのようなものであった。[104]」マルコムは，「その（『戦史』英訳書の－筆者）出版は，暗黙裏に親国王陣営の政治的立場を表明したものである[105]」と指摘している。バンスは，『戦史』の英訳書に関して，「ホッブズの最初の公刊物は，暗黙の裡に親王党主義者の立場を唄っている[106]」と述べている。ミラーは，ホッブズの『戦史』翻訳は，チャールズ一世の国王親政の断行を巡る議会との闘争に関する「評釈」と見ることが可能であると指摘している[107]。

私はこれまで「序文群」を主たる素材として初期ホッブズの情念論，宗教論，統治者論，そして，政体論などに関わる所見を考察して来たが，それらの考察に照らしてみて，上記の諸家の見方に異存はない。彼が国王陣営に加担していた証として，民衆階層の情念の噴出とその政治的帰結を極めて深刻に捉えていたこと，民衆と彼らを操るデマゴーグの結託を厳しく糾弾していたこと，その結果として，政体論として民主政を非常に嫌悪していたこと，新・旧教の何れを問わず，教会勢力による国家統治を批判していたこと，等々が想起される。そこで，ここでは以上を補足する意味で，彼の国王陣営加担を伺い得る別の材料を取り出して見ることにする。

先ずホッブズは，晩年に著した「自叙伝」の中で，『戦史』を翻訳した理由について，「我ハコノ著者ヲ翻訳セリ，ソワ（政治的－筆者）協議ニ際シテ，雄弁家ヲ忌避セヨ，トイギリス人ニ彼ヨリ言ワシメンガタメナリ[108]」と書いている。ホッブズは，国王陣営と議会陣営の抗争が激化する政情下にあって，議会陣営の人物の中にアテネ民主政下に出現したデマゴーグの再来を読み取ったのである。彼は「キャヴェンディッシュ卿への献辞」の中で，議会陣営のデマゴーグが暗躍している次第を警告している。「・・・名誉と

不名誉の行為は，歴史においては，明白且つくっきりと，これはこれという形で表れますが，当代（傍点は筆者）においては，たいそう偽装されていますので，それらの判断について，大きな過ちを犯さない者は，非常に注意深い者だけに限られます。(109)」次にホッブズの初期時代の人脈を取り出してみると，その多くが国王陣営に加担した人物である。①彼が，30年間にわたって家庭教師兼秘書として仕え，『戦史』翻訳作業に結実する思想形成の中心的な場となったキャヴェンディッシュ家の，初代から三代までのデヴォンシャー伯爵は，スチュアート王朝に対して，「忠実であった(110)」。また，ホッブズが『法学要綱』を献呈したニュー・カスル伯爵は，彼が仕えた第二代デヴォンシャー伯爵と従兄弟の間柄で，初期時代から親交を結んでいたが，彼もまた，国王陣営に組した人物であった(111)。②ホッブズが，一時，秘書として仕えたベーコンは，「国王の顧問官」であり，国王陣営と議会陣営の対立において，後者の論客であった，コモン・ローヤーの代表者，クックと対決した。ベーコンは議会陣営の攻撃によって，1626年に失脚した(112)。③マルコムが編纂したホッブズの書簡集に登場する初期ホッブズへの書簡の二人の差出人，メーソンとアグライオンビー（George Aglionby）は，国王の顕官，バッキンガム公爵と繋がりのあった人物であった(113)。④オーブリーは，ホッブズが，1634年，生まれ故郷，ウィルトシャーを訪ねた時，有名な劇作家・詩人であったベン・ジョンソン（Ben Johnson，1572-1637）が「大いに話題になった」と述べている(114)。また，ホッブズは，『戦史』翻訳の原稿をジョンソンの閲覧に供したとされている(115)。ジョンソンは，ジェームズ一世のために，「ピューリタンを攻撃する」作品を幾編も書いた(116)。また，彼はタキトゥスの『年代記』に登場するティベリウスの顕官セイヤヌスを主題とする脚本を書いたが，その真意は，セイヤヌスを利用した「この種の批判（ジェームズ一世の顕官に対する批判－筆者）は危険性を帯び得る」と言うことを警告することにあった(117)。ジョンソンは国

王陣営の文人であった[118]。⑤さらに，ペックは，初期ホッブズの思想形成を，「ジェームズ一世の宮廷」あるいは「宮廷の諸々のネットワーク」とのかかわりで考察すべき旨を主張し，新たにブルース（Edward Bruce, ?-1611）なる宮廷人に注目している[119]。以上のように，初期ホッブズは，ルネサンス思潮の圏内にあって，ツキディデスの『戦史』から学んだ人間性論＝情念論，並びに政治思想を踏まえて，17世紀初頭に醸し出されてきた国王陣営と議会陣営の軋轢に処して，前者の陣営に加担することになった。ホッブズは，基本的には，既存のスチュアート朝の政治体制を支持する政治スタンスを採ったのである。

それではホッブズは，スチュアート王政に対して絶対的且つ人格的な忠誠・帰依の態度で臨んでいたのであろうか。東洋流の言い草を借用すると，「君，君たらざるとも，臣，臣たらざるべからず」といった呈の態度を取ったのか。マーチニッチは，然りと応じて，ホッブズは，「国王に対しては，たとえ，命令されたものが残酷で不公正なものであっても『何事も拒絶できない』」と主張する王権神授説と「事実上（傍点は筆者），同様の（政治的－筆者）結論に達していた」と指摘している[120]。しかし，私は，ホッブズは必ずしも，斯様な態度は取っていなかったと考える。上段の自然法思想や国家思想の項で述べた様に，ホッブズの最高の価値関心はイングランドの「公共善 public good」＝「国家の利益」の獲得・維持という点におかれていた。また，同じく既述の所であるが，彼がマキャヴェリ以来のルネサンス人から学んだ「国家理性論」も，マイネッケが指摘したように，斯様な境地に立つ観念であった。更にここで，彼が政体論として純粋型の君主政よりも，たとえ最高指導者の強力な指導性を前提としたものではあれ，混合政体を良しとしていた点も，併せて想起することが可能である。もう一つ，「序文群」の中には，Commonwealth という言が，一か所ではあるが，出てくる[121]。ここでは，チューダー朝の有名な政治思想家，トマス・スミスが唱え

た「国王のいるコモンウエルス[122]」という混合王政の観念が援用されていると見ることが出来る。ホッブズには，イングランド国家が，ジェームズ一世やチャールズ一世のパーソナルな所有物であるというような考えはなかったのである。

従って，ホッブズは，例えば，スチュアート王政が進めた個別の種々の政策の全体について，絶対的且つ無条件に順応するといった態度は示していない。逆に，国王の政策に対して批判的な態度を示した事例もあったのである。前段において言及した30年戦争期のプファルツ選帝侯の問題に対する対応もそのケースである。マルカムやアダムズによると，ホッブズが仕えた第二代デヴォンシャー伯爵は，1620年代の初頭，反ハプスブルグ・反スペインの外交政策を唱導し，カルヴァン派のプファルツ選帝侯の大義を熱心に支援したサウサンプトン伯爵 the Earl of Southampton を指導者とする政治集団のメンバーであった[123]。ホッブズの主人は，反王朝陣営の政治集団に加担したのである。他方，マルカムは次の様にも書いている。「デヴォンシャーは，政治的に積極的であったと言っても，彼の意見がプファルツ運動の急進的陣営に与するものであったと考える謂われは無い。彼のイングランドのカソリシズム対する敵対にも拘らず，彼の外交政策が純粋のプロテスタント陣営の戦士たる観念から出ているとも思えない。[124]」そしてマルカムは，ホッブズも，1622年段階では，「親プファルツ陣営に属していたと思われる[125]」と述べている。彼も，第二代デヴォンシャー伯爵と同様な「政治的態度[126]」を取ったのである。彼らにとって，プハァルツ選帝侯問題の判断基準になったのは，先述の様に，最早，宗教の在り様ではなくてイングランド国家の利益であった。従って，イングランド内外の政治状況の推移によっては，親プファルツ陣営から離れて，カソリック派の神聖ローマ皇帝の陣営に加担することもあり得たということになる。さらに，第二代デヴォンシャー伯爵とホッブズは，1620年代，サウサンプトン，サンドズ Edwin

Sandys そしてディッグズ Dudley Digges などの議会陣営の面々と共に，ヴァージニア植民会社 the Virginia Company の経営に参画していることも明らかにされている[127]。斯様な点を勘案して見ると，ホッブズが国王に対して絶対的・人格的な帰依の姿勢を取っていたと見ることは出来ないと思われる。斯様な留保を付した上で，初期ホッブズは，国王陣営と議会陣営の軋轢・衝突に際して，全体的に見ると，前者の立場を支持していたと判断することが出来るのである。

（4）むすび－本稿の総括と後期ホッブズへの若干の展望－

以上，初期ホッブズの政治思想の考察を試みた。ここで本稿を総括し，併せて，後期思想への若干の展望を試みてみたい。初期ホッブズの政治思想は，マキャヴェリ以来のルネサンス政治思潮の影響下に形成され，彼は，その集大成の作業として，1629 年に，ツキディデスの史書，『戦史』の翻訳書を世に出した。そして，この翻訳書の冒頭に三編の「序文群」を書いて，彼の道徳・政治思想を披歴した。本稿はそれらを中心素材として成ったものである。

初期ホッブズは，アリストテレス・アキナス流の自然法思想を未だ，明白に離脱する段には至ってなく，それを政治世界の理想・規範と受け止めていた。従って，彼の政治思想は個々人の利益や福祉の充足ではなく，国家の統一・安定・平和の実現を究極目標として掲げるものであった。彼はイングランド人として，母国の秩序・安定・平和の確立を政治理想として掲げていたのである。しかし，スチュアート朝下のイングランド内外の現実の政治状況は，伝統的自然法の趣旨に反して，国王陣営と議会陣営の確執の亢進や 30 年戦争の勃発・拡大などに見られる様に，分裂・対立・戦争の状態に陥っていた。ホッブズも，先行のルネサンス人と同様に，理想と現実の乖離という

問題に直面し，両者の架橋という難題と取り組むことになる。

ところで，この問題に直面して，伝統的自然法の担い手を自負する哲学者・神学者たちの拠る教会勢力は，専ら，自然法に関わる教義や戒律を教条的・形式的に喧伝するだけで，斯様な問題が生じて来る抑々の原因如何については沈黙していた。理想世界如何という建前を教条的に説き立てる戒律を以てしては，現実世界と理想世界との乖離を埋めて行くことは出来ない。ホッブズはルネサンス人に倣って，自然法の世界と現実の世界との乖離の原因を探るべく，古代期の政治的歴史に分け入った。その際，彼が最も魅せられたのが，ツキディデスの『戦史』であり，この史書こそ，「真実性」と「修辞性」に優れ，それ故に高度の政治的「有用性」を持つ「最高の政治的歴史」であると考えた。ツキディデスの歴史学は，自然法の実現の方途の追究に，最も重要な素材を提供するものと考えられたのである。彼は本書の翻訳作業を通して，イングランド内外における分裂・対立・戦争の根本的原因が，「虚栄心」・「野心」・「党派心」などの人間情念の噴出にある次第を確認した。これらの諸情念は，社会における他人・他集団に対する優越の欲望を意味するが，ホッブズは，斯様な社会的欲望こそが，人間の精神活動の深奥を支配し，人間社会に戦争状態を生み出す根本因子であると見たのである。その際，彼は社会的欲望を抑制し得る恐怖心や道徳心の存在に気づいていたが，それらさえも，「虚栄心」の作動をよく押しとどめるものではなかった。彼は，人間の様々の精神的能力の中で，虚栄心を初めとする情念こそが，人間行動に「最大の影響力」を持つと考えた。哲学者・神学者の教義的戒律が無力な理由がここにある。斯様にして，ホッブズにとってツキディデスの歴史学は，現実世界の戦争状態の原因＝歴史の「真実」を認識する最重要な素材を提供したのである。そして，初期のホッブズにとって，伝統的自然法は，未だ，最高規範としての位置を失っていないが，深刻な情念認識の故に，それが「自明の理」（シュトラウス）であったとまでは言えないと考

える。

ところで，ツキディデスが，ペロポネソス戦争期に，情念の世界の消極的肯定に止まったソフィストを批判したのと同様に，ホッブズも亦，17世紀初頭のソフィストではなかった。彼は現実の情念世界を出立点として，自然法の理想世界へと接近していく為の手立てを模索した。その際，彼は，やはりルネサンス人と同様に，自然法の実現に接近する主たる担い手を在来の諸々のキリスト教会にではなく，その宗教的支配からの独立を求める新興の世俗的国家に期待することになる。ホッブズの国家思想は統治者論と政体論の二本柱からなっていた。前者を論じるに際して，彼は，国家の成員を三つのグループに区分けした。先ず，一般の民衆は，情念に翻弄される傾向の強い階層である。二番目は，民衆におもねて巧妙な弁舌を操り，民衆の指導者に成りあがったデマゴーグである。これら二つのグループは，一体になって国家秩序の混乱を惹起・助長し，それを攪乱・破壊するものと捉えられ，この部類は統治者として不適格である。他方，ホッブズは，国民の中に，彼らとは異なって，国家の公共善 public good の実現に尽力する知力・徳力・政治力に秀でた「高尚な人」が存在する次第を認め，彼らを主体とする政治統治に期待をかけた。そして，斯様な情念論・統治者論との関わりにおいて，政体論では，純粋な形の民主政と貴族政の双方を否認し，同じく純粋な形の君主政にも与さなかった。ホッブズは現実の政治過程の展開において，民衆勢力の動向が持つ比重の大きさを熟知していた。だから彼は，理想の政体論としては，これらの三政体を時機に合わせて適宜，組み合わせた混合政体が望ましいと考えた。その場合，実際上，彼は君主の強力な政治指導を伴う混合政体を期待した。彼が『戦史』の中で最も推奨したのは，ペリクレスの強力な政治指導下の民主政体であった。斯様にして初期ホッブズは，国王を頂点に擁く有能・有徳な「高尚な人」の政治指導と彼らを主体とする政治政体の樹立によって，自然法の実現＝情念の統制と国家の統一・平和へ向けて

の試みが可能である旨を展望したのである。情念の奔流による国家内外の混乱・無秩序は統治者と政体の宜しきを得ることによって解決の可能性があると見立てられたわけである。ホッブズは，斯様な国家思想を介して，17世紀初頭のイングランドにおける秩序と平和の確立へ向けての道筋を展望した。そして，彼は，母国で展開した国王陣営と議会陣営の抗争に際して，政治的選択としては，全体的に見れば国王陣営に加担したのであった。

以上，1629年までの初期ホッブズが，ツキディデス翻訳作業を通して開示した政治思想を，自然法論・情念論・国家論の三点に渡って考察した。ここで，それを基にして，さらに，1630年代のホッブズに関する若干の知見をも加味して，後期政治思想への展望を試み，本稿を閉じたいと思う。と言っても，本稿の冒頭で引用した1640年の「ニューカスル伯への献辞」で打ち出されたホッブズの新境地，つまり，人間の情念が「絶対的に信頼できる」ものと認識されると共に，伝統的自然法が「空中に築かれていた」ものと理解され，それに代えて新自然法を構築して行く旨の宣言がなされるに至った経緯に関して限られた展望を試みるに過ぎない(128)。従って文字通りの「若干の展望」の域を出るものでないことをお断りしておきたい。

初期ホッブズの政治思想は，基本的にはルネサンス政治思潮の影響下に形成されたものであった。しかしながら，ホッブズの境地と彼に先行するルネサンス人との間に，微妙な相違が存在した次第についても示唆してきた。ホッブズは，伝統的自然法の圏内に止まっていたが，必ずしも，それを「自明の理」として受け入れてはいなかった。ルネサンス人たちは，統治者と政体の宜しきの確保によって，自然法の理想世界への到達が可能であると確信していた。例えば，リプシウスの見地について，次のように説明されている。

「統治者が最も留意すべきは，『キルケーの鞭』によって，民衆を合理的な『命令・服従の秩序』へと巧みに馴らし，適切に管理することである。すなわち，民衆を紀律化することである。その時，民衆は他律的に支配されるだけでなく，自己規律によってその合理的な秩序

に服するであろう。民衆は，・・・権力への恐れから秩序に服し，自己抑制するだけではなく，また紀律の精神の故に自己規律に基づいて秩序を積極的に形成し，それに服するであろう。(129)」

リプシウスは，ホメロスの作品『オデッュセイア』に登場する妖女，「キルケー」の如く，統治者が民衆に対して適切な統治・教育を施すことによって，民衆の間に，自己規律と自己管理の能力を涵養して行くことは可能である。統治者による民衆教化の宜しきを得て，民衆は自然法の理想世界へ到達する能力を養うことが可能であると考えた。この点において，マキャヴェリなど，他のルネサンス人についても同様である。マキャヴェリは，「ルネサンスの社会的・精神的アノミーを《絶対主義》的に解決し得る『国家』（stato）を確立し，それを通して，彼が常に引証していた古代ローマの都市国家に見られたような社会公共生活の主体的・自律的成員を『再生』（Rinascimento）させようとする思考(130)」を持っていた。また，マキャヴェリは，その共和国論において，「人間の変革，すなわち，自らの利益のみを追求する態度を改めて公共の利益を行動の基準とするようになること」が政治教育の力で可能であると考えた(131)。さらに，彼の「リアリズム」と「理想主義」の二つの要素は，「相互に排除しあう関係には」なく，彼は，人間は「立派に組織された共同体で暮らせば良き市民になり得る存在」であると主張したと言われている(132)。ボーダンにおいても，「誤まり易い意志（volontê faillible）を有する大多数の人間にとっては」，「至高善」たる神の世界へ「一挙に到達することは不可能である。」「しかしながら，「人間は自己保存から出発しつつもこの究極目的に到達可能であ」ると考えられた。そして，その鍵は，国家の主導する「教育体系」に求められたのである(133)。ベーコンに関しても次のように指摘されている。「ベイコンの倫理学において，最高位を占めているのは，倫理や道徳ではなく，神学や宗教である。倫理や道徳は，神学や宗教の教えに注意を払いつつ，善の本質を示

したり，意志を調節していかなければならないのである。・・・神の愛は，人間の精神を奮い立たせ，道徳の教え以上に，人間を完成させるのである。[134]」その際，ルネサンス人，ベーコンにとって「神の愛」の担い手として期待されているのは国家である。斯様に，ホッブズに先行するルネサンス人達は，情念の世界と自然法の世界の隔たりを十分に知りながら，終局的には国家・統治者の宜しきを媒介にして，前者の世界を克服して，後者の世界へ到達可能であると考えた。彼らにとって，自然法は「自明の理」であったのである。それでは，ホッブズの場合はどうであったのか。確かに彼の場合も，その国家思想において，これらルネサンス人の境地を受け入れる余地が皆無であったとは言えない。レイクも初期ホッブズの課題が，「政治的水路」の世界で，「人は，如何にして適切な説得 argument の手段によって，より道徳的な共同体の成員になり得るか」という「道徳教育の可能性」を追求することであったとまで言っている[135]。初期ホッブズにおいては，未だ，情念が「絶対的に信頼できる」ものと考えられていたのではないのである。しかしながら，彼の場合は，ツキディデスを「最高の政治的歴史家」と見ていた所に表れている様に，『戦史』の人間観の影響を受けて極めて深刻な情念認識を持っていた。彼は，情念が人間にとって「必然 necessity」であり，それが人間の「本質 nature」であるという言葉を吐いていた。彼は伝統的自然法と決別する段には至っていないが，他のルネサンス人とは異なり，それに対する一定の懐疑的姿勢を持っていたと考えられる。ホッブズは，人間情念に対する極めて深刻な認識の故に，情念の世界と自然法の世界の乖離をうずめていく手立て－先述の統治者論を政体論－に関して，必ずしも，充分なる確信が持てなかったと思う。

そして，初期ホッブズの厳しい情念観に起因する伝統的自然法に対する疑念の萌芽は，『戦史』翻訳書の刊行の後，1630 年代に収縮するどころか，益々，成長・拡大していったと考えられる。その最大の理由は，彼が 1630

年代の初頭に，ガリレオの力学的運動論（慣性の法則）に接触したことであった。スキナーに拠れば，彼は1630年代初頭，自然科学思想に強い関心を寄せていた第二代デヴォンシャー伯爵の二人の従兄弟，チャールズ・キャヴェンディッシュ卿と彼の兄，ニューカスル侯爵によって，「科学的体験 the scientific experiments [(136)]」に導かれた。ホッブズは，1634年1月のニューカスル伯爵宛て書簡で，1632年に出版されたガリレオの『二大世界体系についての対話』（『天文学対話』）について言及している。ホッブズはそこで，イタリアにおいては，「宗教と自然理性との間の対立」という問題に関して，宗教改革者のルターやカルヴァンよりも，ガリレオの書物が大きな影響を与えていると書き送っている [(137)]。同年，ホッブズは第三代デヴォンシャー伯爵と共に，二年間に渡る大陸旅行 grand tour へ出発した [(138)]。この旅行は，ホッブズのガリレオ運動論への依拠を決定づけた。ホッブズは，この旅行の間に，イタリアにガリレオを訪ねている [(139)]。また，フランスでは，「ガリレオの思想をフランスに紹介した [(140)]」，フランス自然科学思想の指導者，マラン・メルセンヌと交流した [(141)]。彼は晩年の自叙伝で，フランスやイタリアなどへの旅行の途次，ガリレオ流の運動理論の思索に没頭した次第を，次のように述べている。

「・・・我ハ絶エルコトナク事物ノ本性ヲ船上ニアレ，車上ニアレ，騎上ニアレ思惟セリ。カツ，我ニハマコト，全世界ニ唯一ツノ事物ノミ，多クノ様相ニヨリ歪メラレタルモノニセヨ，真ナリト見ユ。・・・内奥ノ部分ニ実在スルハ運動ノミナリ。[(142)]」

ホッブズは欧州旅行の途次，全世界の存在物の「内奥」に「実在」する「事物ノ本性」＝「唯一ノ事物」は，物体の「運動」であるというガリレオ流の力学思想＝機械論に全精力を傾けて考えをめぐらした次第を明らかにしている。そして，1937年，イングランドへ帰国後，運動の理論を基軸とする，物体論・人間論・市民論の三部作の作成に着手した [(143)] [(144)]。彼は運動観念をキー・コンセプトとして，自然・人間・国家の三領域からなる世界

論・宇宙論の学問体系，新世界像の樹立に取りかかったのである。この様にして情念論や政治論は，世界・宇宙の運動体系の中に組み込まれることになった。しかしながら，ここで留意すべきは，後期ホッブズの初発の段のガリレオ導入は，唐突に起こったものではないということである。私は，初期段階における深刻な情念認識が，突破口となり，ガリレオの運動論への共鳴を誘発したと考える。深刻な情念認識が，伝統的世界・宇宙像や自然法思想の中に亀裂を生み出し，それを攪乱・解体して行ったのである。

それでは，ホッブズがガリレオ力学の運動論によって人間情念の原因や動きを理解するに至ったことは，初期ホッブズの情念論に如何なる変化を齎したのか。ホッブズは，既に引用済みの所であるが，ツキディデスの情念理解を説明する文脈において，次のように言っていた。

「・・・その（ツキディデスの－筆者）文章の難解さは，その深遠さに由来する。その文章は人間の情念に関する熟考 contemplation の結果である。(145)」

「人は，情念なるものを，相当の熟考 meditation を経て初めて，見抜くことが出来るのだから，我々は，人が，たったの一言で以て，情念を理解すべきだと期待してはならない。(146)」

「他国の強大さに対する妬みや将来の侵害に対する恐怖のような，敵対を生み出す内的動機は，推測的な conjectual ものに過ぎず，歴史家が常に注目しておかなければならない事実ではない。(147)」

これらの引用文でホッブズは，人間や人間集団の行動の原動力たる諸情念は，具体的・可視的な「事実」とは異なり，不可視の意識世界に関わるものだから，それ相当の熟考力あるいは推測力の持主だけが認識可能であると言っている。熟考力や推測力は多くの観察・経験を積み重ねることによって取得される能力である。初期ホッブズの情念観は，「純粋な観察(148)」つまり，経験的認識に拠るものであった。それらは，人間の心中の意識・感情の在り方に関する経験的な認識力能を示すものである。従って，そこでは未だ，人間情念の発生の原因＝メカニズムは問われることがない。戦争や内

乱の原因が，情念にあることは突き止めたが，情念の原因を知るには至っていない。それに対して1630年代のホッブズは，ガリレオ力学の受容によって，情念の発生と展開のメカニズムを，物体の運動として理解することにより，個々の人間行動の原因の深層世界の普遍的原因を把握するに至った。

ホッブズの情念観は，その根拠が，初期段階のツキディデスの歴史学から1630年代のガリレオの力学へ移ると共に，経験則による段階から科学法則による段階へ変わった。それに伴って，先ず，初期段階において既に，深刻な相貌を呈していた情念観は，更に一段と深刻さの度合いを増すことになった。彼は初期段階で，情念の普遍的性格を「必然」や「本質」という言葉で表現していたが，その根拠は不明であった。しかし，ガリレオに学んで，情念が物体の運動として理解されたことにより，その科学的・法則的理解が可能となった。そして，初期時代の「必然」や「本質」という言葉の内実のメカニズムが解明された。人間の精神活動において，情念は字義通り，「必然」性と「本質」性を帯びるものと理解されることになったのである。斯様にして，「ニュー・カスル伯への献辞」の中で，情念こそが，「絶対的に信頼できる」ものという見地が表明されたのである。情念は，字義通り「必然」的で「本質」的なものと理解され「絶対的に信頼できる」ものとなったのである。そして，他方，情念以外の人間の精神的諸能力は，最早，「絶対的に信頼できる」ものではなくなって来る。勿論，ホッブズは，人間の心中におけるそれらの存在自体を認めないわけではないのであるが。ただ，「絶対的に信頼できる」ものではないと理解されるに至ったのである。如様にして，彼は，初期の段では，人間の情念を人間の行動に対して「最大の影響力」をもつものと捉えたが，後期初頭の段では人間の行動を測るに際して「絶対的に信頼できる」ものと理解するに至ったのである。

そして次に，情念の世界が必然的・法則的な運動理論によって理解され，それのみが精神的諸能力の中で「絶対的に信頼できる」ものとされたことに

より，既に初期時代から萌していた情念の世界と伝統的自然法の世界，現実世界と理想世界のシェーレが極大となる。そして統治者の道徳的陶冶と政体の工夫によってこのシェーレを縮小して行く可能性は消滅し，二つの世界を架橋することが不可能となる。この様にして初期段階で萌していた伝統的自然法への懐疑的姿勢は決定的懐疑の段階に達した。そして遂に，ホッブズは,「ニューカスル候への献辞」において，伝統的自然法が「空中に吊るされていた」と喝破するに至る。伝統的自然法は人間能力にとって到達不可能な世界を空想していたという認識が生まれたのである。勿論その際，繰り返しになるが，初期時代と1630年代の関連面にも留意しなければならない。ホッブズは，伝統的自然法の実現方を模索して,『戦史』の翻訳作業に取り組み，人間情念の深刻さを認識した。これが因となって，力学運動論に拠る法則的・普遍的情念認識を誘発した。1630年代に生まれた力学に拠る情念認識と伝統的自然法への決別は必ずしも，突発的なものではない。かくしてホッブズは，初期時代の蓄積を必須の媒介項として，新しい自然法の構築作業に乗り出すことになる。彼は新自然法の構築作業の手順を「ニューカスル伯への献辞」のなかで次の様に－本稿の冒頭に次いで再度の引用であるが－打ち出したのである。「まず，絶対的に信頼できる情念が認めざるを得ないような諸原理を基礎として打ち立て，次にその上に，個々の自然法（これまで，それは空中に築かれていた）に関する真理を，段階を追って築き，全体を確固不動のものとする・・・(149)」そして，後の著作で，最初の構想に沿って自然権論と戦争状態論からなる自然状態論が導出される。そして，それを基礎として，戦争状態論を克服すべく，次の後半部の構想に沿って，自然権と自然法の区別を前提として，生命保存論，契約論，国家論などを内容とする自然法論が展開されることになる(150)。更には，新自然法を現実の世界に実現して行く方途の模索－その際，当然，内戦の勃発，共和政の出現，そして王政の復活などの内戦期の歴史的激動が影響を及ぼしたことが推察さ

れる－も行われていくものと考えられるのである(151)。

＊なお，本稿の末尾に，初期ホッブズ（1588-1629年）研究の文献目録を，附録として添付させていただいた。参考に供していただければ幸いである(152)。

（注）

(1)　従来の研究の中には，ホッブズのツキディデス論は，戦争原因論たる情念論を扱っているだけで，建設的な国家思想には関説していないという理解がみられる。例えば，サクソンハウスは，「序文群」は，「戦争の原因，戦争の過程，そしてその帰結」に関わる問題を扱い，「政治秩序の建設 political foundation の問題」を論じてはいないと指摘している。そして彼女は，『余暇』に収録されている「タキトゥスの冒頭の部分についての考察」が，そのために書かれたと見ている。(cf.，A. W. Saxonhouse, Hobbes and the Beginnings of Modern Political Thought, N. B. Reynolds and A. W. Saxonhouse (eds.), Three Discourses : A Critical Modern Edition of Newly Identified Work of the Young Hobbes, Chicago, 1995, pp. 128・139・141. しかし，前稿で説明した様に，ホッブズは，「序文群」の中で，『戦史』こそが，「真実性」と「修辞性」の双方を満たしているが故に，「有用性」に富む「最高の政治的歴史」であると喝破した。つまり，彼が『戦史』を殊更，称揚した理由は，この書物が，17世紀イングランドの政治秩序建設の方途如何を模索して行く上で，高度の有用性を備えている次第を確信したためである。参照，「トマス・ホッブズの初期政治思想－自然法・情念・国家－（1）」『福岡大学法学論叢』第57巻第1号，2012年，56頁。ホッブズにとって，情念論は秩序建設論を展開するための前提であった。ただし，既述のように，『余暇』に描出されている世界がルネサンス思潮のそれであることは明らかであるから，タキトゥスの『年代記』の冒頭のアウグストゥス論を素材とする秩序建設論が，以下で紹介するホッブズのそれと共通性を持つことは当然である。また，私は，前稿で指摘した様に，この文章がホッブズのものであること自体に疑問を持っているし，仮にホッブズのものであるとしても，タキトゥスをツキディデスに優先させる如き扱いには組することが出来ない。参照，前掲拙稿，76-79頁，88-90頁。

(2)　T. Hobbes, The History of the Grecian War written by Thucydides, W. Molesworth (ed.), The English Works of Thomas Hobbes, Vol. Ⅷ, 1843 (Second Reprint, 1966,

Scientia Verlag Aalen), pp. iii-iv,（以下，E. W. Ⅷ, pp. iii-iv. と略記）

(3)　A. W. Saxonhouse, ibid., pp. 124-125.

(4)　近藤和彦「近世ヨーロッパ」『岩波講座：世界歴史（16)』岩波書店，1999 年，51 頁。

(5)　30 年戦争の経緯と 17 世紀前半期イングランドの外交政策に関しては，次の文献を参照。君塚直隆『近代ヨーロッパ国際政治史』有斐閣，2010 年，65-84 頁。常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会』岩波書店，1990 年。岩井　淳「初期スチュアート朝の外交政策と国際関係」『静岡大学人文学部人文論集』第 51 号 -1，2000 年。

(6)　Cf., F. Tönnies, Thomas Hobbes : Leben und Lehre, Stuttgart, 1925, S. 9. F. Tönnies, Lettres inédites, Archives de philosophie,Vol. xii, cahier ii, 1936, p. 80.

(7)　Cf. N. Malcolm, Reason of State, Propaganda, and the Thirty Years' War : An Unknown Translation by Thomas Hobbes, Oxford, 2007. スキナーは，マルカムの判断を支持している。Cf. Q. Skinner, Hobbes and Republican Liberty, Cambridge, 2008, p. 6.

(8)　N. Malcolm, ibid., p. 74.

(9)　Cf., ibid., p. 90.

(10)　Cf., ibid., p. 106. この箇所でマルカムは，ホッブズが高く評価したルネサンス人，リプシススも，国家理性論の観点から幾度も宗派替えを行ったと指摘している。

(11)　Cf., ibid., pp. 112-114.

(12)　君塚直隆によれば，カソリック国，フランスの顕官，リシュリーも，フランスの国家利益の立場から，スペインに対抗するために，宗教的立場を排して，プロテスタント陣営に加担・出撃した。参照，君塚直隆，前掲書，75 頁。

(13)　マルカムは，ホッブズの先人，ボーダンとリプシウスについて，両者は，「宗教的統一が国家を強化することを強調し，世俗権力に挑戦する宗教的分離派の撃滅を勧めた。」と指摘している。Cf. N. Malcolm, ibid., p. 103. ホッブズは，斯様なルネサンス思潮を受け継いでいるのである。

(14)　L. Strauss, The Political Philosophy of Thomas Hobbes, Its Basis and Its Genesis, Oxford, 1936, p. 74. 添谷育志・谷　喬・飯島昇蔵訳『ホッブズの政治学』みすず書房，1990 年，99 頁。

(15)　Cf., F. Tönnies , Lettres inédites, p. 80.

(16)　A. W. Saxonhouse, The Origins of Hobbes' Pre-Scientific Thought : An Interpretation of the Horae Subsecivae, Yale University, Ph. D., 1972, pp. 55-6.

(17)　E. W. Vol. Ⅷ, p. vii.

(18)　Ibid., p. viii.

(19)　Ibid., p. vii.

(20)　ここの文脈で,『戦史』と聖書が比較されている次第については,高野清弘から示唆を受けた。参照,『トマス・ホッブズの政治思想』お茶の水書房,1990年,213頁。

(21)　マキャヴェリも,「君主論」の中で,「聖職者による君主政体」について,次のように述べている。「あのような政体は人知の達しえない超越的な原因によって支えられているから,私は語らないことにしよう。なぜならば,神によって樹立され,保持されている以上,それを論ずるのは倣岸不遜な人間の出過ぎた真似になる・・・」(マキアヴェッリ著・河島英昭訳『君主論』岩波書店,1998年,86頁)ここでマキャヴェリは,「人知」では計り知れない超絶的な神観念を駆使して,教会勢力の「傲慢不遜」なる「教会国家」(マキアヴェリ著・池田　廉訳『君主論』会田雄次編『マキアヴェリ:世界の名著(16)』中央公論社,1966年,87頁)の論を糾弾し,神・聖書の世界と教会勢力の切断を試みている。ルネサンス思潮の最後尾の段に位置する初期ホッブズは,『君主論』公刊の約100年後に,「序文群」の中で同様の試みを披歴したのである。そして両人は,斯様の見地を取ることによって,政治主体の教会から国家への移行の主張を基礎づけているのである。また,ボーダンも,「神の知識－それなしには,真の知識はあり得ない－は,先ず,人間,そして次に,自然の研究を通して最もよく得られるものである」と述べている。(Cf., J. W. Allen, A History of Political Thought in the Sixteenth Century, London, 1928, p. 397.)この立言も同様な意図のもとに行われている。

(22)　E. W. Ⅷ, p. vi.

(23)　Ibid., p. xv.

(24)　シュラッターは,ホッブズは,「この文章全体を自分自身のものとして書いた」と述べている。Cf., R. Schlatter, Hobbes's Thucydides, New Brunswick, 1975, p. xxvii. 田中秀夫は,「ホッブズのトゥキュディデースへの共感は,宗教に対する態度にも及んでいる」と指摘している。田中秀夫「ホッブズの初期論説『トゥキュディデースの生涯と歴史』について」『経済論叢(京都大学)』第119巻第4・5巻,1972年,22頁。マーチニッチも,この引用箇所について,「ホッブズについても,(ツキディデスと－筆者)同様のことが言いうると思う」と述べている。A. P. Martinich, A Hobbes Dictionary, Cambridge, USA, 1995, P. 227.

(25)　ホッブズは,この箇所をマルケリヌスの文章とされている「ツキディデスの生涯と文体」に拠っていると考えられる(cf., E. W. Ⅷ. xxix)。マルケリヌスは,「トゥー

キュディデースは哲学者のなかではアナクサゴラースに学んだ」と記している。参照，小西晴雄訳『トゥーキュディデース：世界古典文学全集（11)』筑摩書房，1971 年，320 頁。小西によれば，マルケリヌスは，詳細は不明だが，3 ～ 5 世紀頃のアレキサンドリア学派の一人であろうとされている。参照，同上書，317 頁。

(26)　以下のアナクサゴラスに関する記述は，主としては，次の文献を典拠としている。岩田靖夫「ソクラテス以前の哲学」岩田靖夫他編『西洋思想のあゆみ－ロゴスの諸相－』有斐閣，1993 年，38-63 頁。岩崎允胤『要説西洋古代哲学史』大阪経済法科大学出版部，1994 年，9-44 頁。

(27)　参照，高津春繁『古代ギリシア文学史』岩波書店，1952 年，120-121 頁。

(28)　岩田靖夫によれば，アナクサゴラスの「自然的理性の光」は，南イタリアの植民都市，エレアの思想家，パルメニデスを継承したものである。参照，岩田靖男他編，前掲書，50・58 頁。彼において「理性」とは，「感覚的現象を超えて事物の真なる本性を直接に把握する力」と定義される。「外観を通して正体を見破る閃き」，そういう意味での「直覚知」であった。パルメニデスは，斯様な意味での「理性によって把握されるもののみが真に存在する」と主張した。参照，同上，51-52 頁。その主張には，人間の自然的能力に対する信頼と確信が宿っていたのである。

(29)　ソクラテスのアナクサゴラス観については，プラトンが「パイドン」の中で解説している。参照，『プラトン全集（1)』岩波書店，1975 年，283-290 頁。

(30)　ホッブズとツキディデスは，ヘロドトスの『歴史』は神話や伝承などに依存するところが大きく，「真実性」を欠いた「架空の歴史 a picture of history」に過ぎないと手厳しく批判した。Cf.，E. W. Ⅷ，p. xx. ヘロドトスの『歴史』の翻訳者，松平千秋も，その点に関して，ヘロドトスは，「神託や予言の真実性については極めて素直にこれを信じていたようである。」(ヘロドトス著『歴史（下)』岩波書店，1972 年，383 頁）と述べている。それに対してツキディデスは，「往々にして信ずべきよすがもない，たんなる神話的主題を綴った，真実探究というよりも聴衆の興味本位の作文に甘んじること」は許されないと批判している。Cf. E. W. Ⅷ，p. 24. 久保正彰訳『トゥーキュディデース：戦史（上)』岩波書店，1966 年，73 頁。

(31)　ツキディデスは，疫病流行を契機にしてアテネ市民の間に生じてきたソフィスティックな精神的風潮の瀰漫について次の様に批判的に書いている。「生命も金もひとしく今日かぎりと思うようになった人々は，取れるものを早く取り享楽に投ずるべきだ，と考えるようになった。・・・今の歓楽とこれに役立つものであればみな，すなわち利益であり，誉れであり，善であるとする風潮がひろまった。そして宗教的な畏怖も，社会的

な掟も，人間に対する拘束力をすっかり失ってしまった。」(E. W. Ⅷ, p. 208. 久保正彰訳，上掲書，240-241 頁）ホッブズはこの文脈に関して，「生の放縦さが正当化された」と「宗教と法の無視」という二つの脚注を付している。

(32)　ホッブズは，上の引用文で，ニキアス（前 470 頃－前 413）の神託観に言及しているが，ツキディデスは『戦史』のなかでシケリア島からのアテネ軍の撤退の指揮に関して「かれは神託予言のなどの類をやや偏重しすぎる性質であった」(E. W. IX, p. 280. 久保正彰訳，前掲書（下），198 頁。）と批判的な言辞を呈している。しかし，撤退の途次，スパルタ軍に拘束・処刑されるに及んで，次のような賞賛の言葉を呈している。「かれの常日頃の言行が一つとして高き徳にそむくところのなかったことを思えば，私の世代のギリシア人がどうあったにせよ，ただかれのみは，このような不運の極みに終わるべきいわれは無かったのであるが。」(E. W. IX, p. 319. 久保正彰訳，前掲書，242 頁。)

(33)　ツキディデスは，例えば，ペロポネソス戦争の初期，スパルタ陣営が初めて，アテネの周辺に来襲した折，民衆が託宣の高唱に途惑う様を次の様に批判的に描出している。「市民らは辻々に集まって，あるいは出撃を，あるいは自重を説いて激しく議論を戦わせた。辻占い師どもがさまざまに綾をつけた託宣を歌い聞かすと，これを聞こうとする人々があちこちで群れをなしていた。」(E. W. Ⅷ, p. 177, 久保正彰訳，前掲書（上），214 頁。）終段の「これを」以下の箇所は，ホッブズ訳では次の様になっている。every one made the interpretation according to the sway of his own affection.

(34)　Cf. E. W. Ⅷ, pp. xv, xvi, xxix, 302, 404.

(35)　参照，前掲拙稿，64 頁。

(36)　村川堅太郎によれば，デマゴーグの元の言葉は，デーマゴーゴスというギリシア語であり，「民衆の指導者」を意味した。広義には，キモンもペリクレスもこれに入るが，それが扇動政治家という意味に使われるのは，クレオン以降の民衆指導者が，無知な大衆を背景に，好戦的な，所謂，「極端な民主主義者」であったためである。参照，『古典古代の市民たち：大世界史 (2)』文芸春秋社，1967 年。

(37)　参照，前掲拙稿，66 頁。

(38)　参照，前掲拙稿，67-69 頁。

(39)　Cf., E. W. IX, pp. 128-135. 久保正彰訳，前掲書（下），37-44 頁。

(40)　Cf., Ibid., pp. 153-158. 久保正彰訳，前掲書（下），62-68 頁。

(41)　Cf., E. W. Ⅷ, p. 404.

(42)　ルネサンス政治思潮の開拓者，マキャヴェリも民衆の動向が国家の政治過程において

大きな役割を果たすことを認めている。マキャヴェリ著・永井三明訳『政略論－ティトゥス・リウィウス「ローマ史」にもとづく論考』会田勇次編『マキアヴェリ：世界の名著（16)』中央公論社，1966年，181-183頁，333-342頁。

(43)　E. W. Ⅷ, p. viii.

(44)　Ibid., pp. ix・xxix.

(45)　Ibid., p. x.

(46)　Ibid., p. xi.

(47)　Cf. ibid., p. v.

(48)　E. W. Ⅷ, p. vii.

(49)　Cf., N. Malcolm, ibid., p. 100.

(50)　J. Barnouw, Prudence et science chez Hobbes, Y. C. Zarka et J. Bernhardt (éd), Thomas Hobbes : philosophie première, théorie de la science et politique, Paris, 1990, p. 107.

(51)　佐々木　毅「政治的思慮についての一考察－J. リプシウスを中心にして－」有賀　弘・佐々木　毅編『民主主義思想の源流』東京大学出版会，1986年，8頁。

(52)　E. W. Ⅷ, p. 178. 久保正彰訳，前掲書（上），214-215頁。なお，久保訳で「政策」の箇所を，ホッブズはjudgementと英訳している。

(53)　佐々木　毅，前掲論文，13頁。

(54)　マイネッケ著・岸田達也訳『近代史における国家理性の理念』林健太郎編『世界の名著（54)：マイネッケ』中央公論社，1969年，148頁。

(55)　Cf., E. W. Ⅷ, pp. iii-iv. 彼は，1610年，1614年，1621年，1624年，1625年，そして1626年のそれぞれの議会に，庶民院議員として，また，1626年には，デヴォンシャー伯爵を継いだことにより，貴族院議員としても国政に参加した。Cf., N. Malcolm, ibid., p. 77. K. Schuhmann, Hobbes : Une chronique : cheminement de sa pensée et sa vie, Paris, 1998, pp. 25・32・33.

(56)　Cf., E. W. Ⅷ, p. xxi.

(57)　Ibid., p. xxi.

(58)　Ibid., p. xxix.

(59)　Ibid., p. xvi.

(60)　Cf., Ibid., p. xvii.

(61)　Cf., Ibid., pp. 16・19-20・23・172. 参照，久保正彰訳，前掲書（上），67・70・72・209頁。これらの二番目の所では，「独裁政治がおこなわれたギリシアのポリスで

は，為政者はいずれも（傍点は筆者），自分や一族の発展を望む私欲のみに明けくれていた」と極めて消極的な評価がなされている。ちなみに，「独裁政治」のホッブズの英訳は，the tyrants（cf.，E. W. Ⅷ，p. 19.）である。なお，小西晴雄の訳本では，「僭主」と訳されている（参照，『トゥーキュディーデース：世界古典文学全集（11)』筑摩書房，1966 年，10・11 頁)。

(62)　ペイシストラトスの統治に関しては，アテネ都市国家に関する通史の中でも，肯定的な評価がなされている。次の二つの事例を参照。「彼の支配は温和であり，僭主的というより合法的だった・・・。」（村川堅太郎，前掲書，86 頁。）「（彼は－筆者）多面的な政策によって国力の充実と発揚に努めた。」（太田秀通『スパルタとアテネ－古典古代のポリス社会－』岩波書店，1970 年，125 頁。）

(63)　E. W. Ⅷ，p. 144. 久保正彰訳，上掲書（上），183 頁

(64)　参照，久保正彰訳，前掲書（上），397 頁。

(65)　E. W. IX，p. 219.

(66)　Ibid.，p. 319. 久保正彰訳，前掲書（下），242 頁。

(67)　Ibid.，pp. 151-152. 久保正彰訳，前掲書（下），61 頁。

(68)　ちなみに，マキャヴェリも，ニキアスを「遠慮深謀の人」と評価している。マキャヴェリ著・永井三明訳，前掲書，324 頁。

(69)　ツキディデスはヘルモクラテスを，次の様に称賛している。「（彼は－筆者）常日頃より何びとにも劣らぬ知力を示し，とりわけ戦場においては十分な経験と，ひときわすぐれた武勇の振舞いで人に知られた人物であった・・・」（E. W. IX，p. 189. 久保正彰訳，前掲書（下），99 頁。）

(70)　ここで又，『余暇』に収録されている論説，「タキトゥスの冒頭の部分についての考察」に関して言及しておきたい。この論説は先述の様に，古代ローマの歴史家，タキトゥス著，『年代記－ティベリウスからネロへ－』の冒頭部分を素材として書かれたものであるが，これをホッブズの（或いはホッブズが深く関与した）著作であると見做す論者の中には，ホッブズが，この論説に拠って，初代ローマ皇帝，アウグストゥスの政治指導を高く評価していると見ている。Cf. R. Tuck，Hobbes and Tacitus，G. A. J. Rogers and T. Sorell（eds.），Hobbes and History，London，2000，pp. 103-108. Q. Skinner，Visions of Politics，Vol. Ⅲ，Cambridge，2002，p. 55. 私は既述の様に，この文章がホッブズのものであるという見方には疑問を持つが，一ルネサンス人としての初期ホッブズの統治者論が，ルネサンス思潮の影響下に書かれたこの論説の統治者論と共通性を持つことは認めるものである。ホッブズがアウグストゥスをローマのペ

リクレスと見做すことはあり得ることである。なお，ホッブズとタキトゥスの関連については，下段の注（91）も参照。

(71)　E. W. Ⅷ, pp. xvi-xvii.

(72)　Ibid., p. xvi.

(73)　シュトラウスは，「序論（「序文群」－筆者）全体の調子が，ホッブズがその原著者と自らとを一体化させていることを証拠立てている。」(L. Strauss, ibid., p. 59. 添谷育志他訳，前掲書，81頁）と述べ，上引きの文章が，ホッブズの見地でもあると指摘する。

(74)　E. W. IX, p. 180. 久保正彰訳，上掲書（下），90頁。

(75)　Ibid., p. 142. 久保正彰訳，上掲書（下），51頁。Cf., Ibid., pp. 177-179, 参照，同上書，87-88頁。この箇所は，アテネのシケリア遠征途上におけるアルキビアデスをめぐる民衆派指導者間の対立・軋轢について言及したものである。

(76)　ツキディデスは，ペリクレス亡き後のアテネ民衆派の指導者の間の軋轢が，無謀なシケリア遠征の強行と敗北に繋がったと書いている。「かれ（ペリクレス－筆者）の後の者たちは，能力において互いに殆んど優劣の差がなかったので，皆己れこそ第一人者たらんとして民衆に媚び，民衆の恣意にゆだねることとなった。このことが禍して，・・・数多い政治的な過失が繰り返されることとなり，その最たるものがシケリア遠征であった。・・・かれらは民衆指導権をめぐる個人的な中傷に明け暮れて，遠征軍の攻撃力をいちじるしく鈍らせ，また国内の政治的秩序を覆す最初の契機をつくった・・・。」(E. W. Ⅷ, p. 221. 久保正彰訳，前掲書（上），253-254頁。)

(77)　T. Hobbes Malmesburiensis Vita・・・, in W. Molesworth (ed.), Opera Latina, Thomae Hobbes Malmesburiensis Opera Philosophica quae Latine Scripsit Omnia・・・, Londini, MDCCCXLV, Vol. Ⅰ,（以下，O. L. Ⅰと略記）p. lxxxviii. 福鎌忠恕訳「トーマス・ホッブズ著『ラテン詩自叙伝』－ワガ生涯ワワガ著作ト背馳セズ－」『東洋大学大学院紀要』第18集，1981年，16頁。

(78)　ツキディデスがペロポネソス戦争の敗北を踏まえて，アテネ民主政の腐敗を弾劾したのに対して，ヘロドトスは，ペルシャ戦争の勝利後のアテネの興隆を踏まえてアテネ民主政の賛美を，次の様に書いている。「かくてアテナイは強大となったのであるが，自由平等ということが，単に一つの点のみならずあらゆる点において，いかに重要なものであるか，ということを実証したのであった。というのも，アテナイが独裁下にあったときは，近隣のどの国をも戦力で凌ぐことができなかったが，独裁者から解放されるや，断然他を圧して最強国となったからである。これによって見るに，圧制下にあったときは，独裁者のために働くのだというので，故意に卑怯な振舞いをしていたのである

が，自由になってからは，各人がそれぞれ自分自身のために働く意欲を燃やしたことが明らかだからである。」（ヘロドトス著・松平千秋訳，前掲書（中），165頁）

(79)　E. W. IX. pp. 413-414. 久保正彰訳，前掲書（下），340頁。

(80)　ホッブズは，「ツキディデスの生涯と歴史」のなかで，彼は「トラキア地方の王家の末裔」であったと記している。Cf. E. W. Ⅷ, p. viii.

(81)　E. W. Ⅷ, p. 16. 久保正彰訳，前掲書（上），67頁。

(82)　マキャヴェリ著・永井三明訳，前掲書，177頁。

(83)　同上，179頁。ちなみにマキャヴェリは斯様な観点から，「まさに民衆政を君主政や貴族政のもつ効果にとけこませなかったために，アテナイはスパルタにくらべると短命に終わってしまったのである」と，ホッブズと同趣旨の診断を下している。参照，同上，178頁。

(84)　参照，同上，174頁。

(85)　E. W. IX, p. 426. この箇所はホッブズの英訳書からの私訳である。参照，久保正彰訳，前掲書（下），354頁。

(86)　E. W. IX, p. 425.

(87)　参照，ポール・カートリッジ著・橋場　弦監修・新井雅代訳『古代ギリシア11の都市が語る歴史』白水社，104-107頁。また，最近の通史的叙述の中には，この政変によって，「民主政が回復」したと捉えているものもある。参照，桜井万里子・本村凌二『世界の歴史（5)』中央公論新社，2010年，184頁。

(88)　E. W. Ⅷ, p. 221。久保正彰訳，前掲書（上），253頁。

(89)　シュトラウスによると上の引用文に唄われているホッブズの政体論は次のようなものであったと言う。「世襲的絶対君主政こそが最善の国家形態である。・・・正当性を獲得した君主政は，あらゆる簒奪権力から原則的に区別される。分別は君主に対して，貴族政的および民主政的議会を身のまわりに置いて，君主政の利点を貴族政および民主政の利点と結びつけるよう忠告する。もしも何らかの理由から，ある国家体制のなかで世襲的絶対君主政をとることが不可能であるときには，すくなくとも事実上は君主による国事指揮が不可欠である。」（L. Strauss, ibid., p. 70. 添谷育志他訳，前掲書，94頁）

(90)　ジョンソンは，ツキディデスの『戦史』とホッブズの「序文群」の政体論には，相違があると見ている。ツキディデスは，人間性の種別を認め，混合政体を容認したが，ホッブズはそれらを否定したという訳である。（cf., L. M. Johnson, Thucydides, Hobbes and the Interpretation of Realism, DeKalb, 1993, p. 195）そしてジョンソンは，ホッブズが純粋型の絶対君主政を唱えた次第を次の様に指摘している。「・・・何

人であれ，道徳的に他の人より優れているということはない。誰でも野心を秘めているのだ。だから，君主政が国家にとってより増しな政体である。絶対的君主政が競争を根絶し，反乱の芽を摘んだのである。ホッブズの後期の著作は，斯様な初期の理論を練り上げて行ったものである。」（ibid.，p. 156.）この見地は，初期ホッブズは，未だ，人間において情念のみが，「絶対的に信頼できる」ものという見地には至っておらず，情念論を基準とする三類型の人間像を描きだしている点を看過していると思う。

(91)　周知の様に従来，議会陣営が拠った二大政治思潮として，プリン（W. Prynn，1600-1669）やクック（Sir E. Coke，1552-1634）などを代表者とするピューリタニズムとコモン・ロー思想が取り上げられて来た。それに加えて近年来，議会陣営のもう一つの思想的武器として，先の注（70）とも関わるが，タキトゥス主義 tacitism が注目されている。タキトゥス主義は，前出のタキトゥスの史書，『年代記』に拠るもので，16 世紀後半期から 17 世紀初頭期にかけてヨーロッパ各地に普及した。この書物には，「ティベリウスからネロへ」と言う副題が付され，ローマ帝国の第二代皇帝から第五代皇帝までの暴政の歴史が描出されている。サルモンはタキトゥス主義の普及について，次のように指摘している。「タキトゥスが，16 世紀後半期のヨーロッパで最も読まれる古代歴史家となったとき，・・・ティベリウス，カリグラ，ネロのローマと宗教的迫害，内戦，そして絶対主義政治のヨーロッパの類似性を指摘することが一般的になった。」（J. H. M. Salmon，Precept，example，and Degory Wheare and the ars historica，D. R. Kelley and D. H. Sacks（eds.），The historical imagination in early modern Britain：History，rhetoric，and fiction，1500－1800，Cambridge，1997，p. 24.）タキトゥス主義はイングランドへも流入し，そのローマ皇帝批判の色調が，議会陣営のジェームズ一世批判に転用された。そして，従来，1626 年議会で，議会陣営の指導者，エリオットが，顕官，バッキンガム公爵を弾劾した際に，前者が後者をティベリウスの寵臣，セイヤヌスに例えた件がよく引き合いに出された。例えば，サルモンはエリオットのバッキンガム糾弾について次のように書いている。「セイヤヌスは，バッキンガムを糾弾する際の一般的な名称となっていた。ジョン・エリオット卿は，1626 年，議会においてタキトゥスを引用して，その名称を侯爵，バッキンガムに適用した。そして，チャールズ一世は，ティベリウスの役を引き受けることを拒んで，エリオットをロンドン塔へ送った。」（J. H. M. Salmon，Stoicism and Roman Example：Seneca and Tacitus in Jacobean Englannd，Journal of the History of Ideas，Vol. 50，No. 2，1989，p. 225. また，スマッツ，ノルブルック，レヴィたちも同様の指摘を行っている。Cf.，M. Smuts，Court-Centred Politics and the Uses of Roman Historians，c. 1590-1630，

in K. Sharpe and P. Lake (eds.), Culture and Politics in Early Stuart England, Basingstoke (U. K.), 1994, p. 22・56., F. Levy, The Background of Hobbes's *Behemoth*, in D. R. Kelley and D. H. Sacks (eds.), ibid, pp. 264-265.

このように，議会陣営は，タキトゥスの史書を用いてスチュアート王朝の治政を批判・攻撃した。ホッブズは，斯様な次第が彼の『戦史』の翻訳作業の終了後，その出版をしばらくの間，躊躇する主要な原因となった次第について，「序文群」の中の「読者へ」において次のように書いている。「その訳は，私が，(イングランドの－筆者）人々の間に，ローマの民衆と同じ感情を以て，歴史書を読むという傾向が非常に強くなった次第を知ったからです。ローマの民衆は，剣闘士のショーを観るに際して，防御の技よりも，血を見ることに喜びを感じました。それと同様に，彼ら（イングランド人－筆者）の大部分も，軍隊や都市の諸問題を解決する術策如何に関心を持つよりも，巨大な軍勢，血なまぐさい戦闘，そして何千人もの一挙の殺戮を読むことに興味を注ぐことになるでしょう。」(E. W. Ⅷ, p, ix) ホッブズは，政治的歴史の書が，「軍隊と都市問題の処理」，つまり秩序と平和の確立という本来の役割ではなく，抗争と戦闘の為の手引書として読まれ出した点を憂慮したのである。グローヴァーは，その点について，次のように指摘している。「ホッブズ自身は，ツキディデスの書物を翻訳して民主政から必然的に生まれる混乱について諭そうとした。しかし彼は又，斯様な書物が，不満分子によって別の目的，革命を呼び起こす霊感の源・・・として読まれうることに気付いていた。」(S. D. Glover, The Putney Debates : Popular versus Élitist Republicanism, Past and Present, No. 164, 1999, p. 57.)，以上のような次第は，前稿で言及しておいた様に，『余暇』の「タキトゥスの冒頭の部分についての考察」を加重に評価する傾向に警鐘を鳴らし得る一つの理由になると考える。参照，前掲拙稿，88-90 頁。

ところで，上の注（70）で指摘した様に，タキトゥスの『年代記』の冒頭の部分には，ローマ帝国の初代皇帝，アウグストゥスの治政に対する肯定的評価が簡潔に挿入されている。そのために，実は，タキトゥス主義は，二面性を帯びることになったのである。オーヴァーホッフは，「政治的タキティストのある者は，彼らの師のテキストを，君主制に於ける国王や官僚の慎慮に満ちた説明と読み，他の者は，彼の著作の中に，自由国家に於ける市民の道徳的生活の賛美を見出そうとした。」(J. Overhoff, Hobbes' Theory of the Will : Ideological Reasons and Historical Circumstances, Oxford, 2000, p. 95.）と指摘している。サクソンハウスも，同様の指摘を行っている。(Cf. A. W. Saxonhouse, ibid., p. 130.）論説，「タキトゥスの冒頭の部分について」を書いた人

は，オーヴァーホッフの説明の前半部の観点からタキトゥス主義に接近しているわけである。この人は上で言及した議会陣営のエリオットとは異なり，タキトゥ主義を，彼を代表的指導者に戴く議会陣営に対する批判の思想的武器として用いたのである。

(92)　L. M. Johnson, ibid., p. 151.

(93)　E. W. Ⅷ, pp. 25-26. 久保正彰訳，前掲書（上），75頁。

(94)　Ibid., p. 348. 久保正彰訳，前掲書（中），100頁。

(95)　Ibid., p. xxvii.

(96)　グローバーは，「人間性は不変であるという見地は，あらゆるルネサンス思想の基本的要素であった。」と指摘している。Cf., R. A. Glover, Individualism, Absolutism, and Contract in Thomas Hobbes' Political Theory, Hobbes Studies, No. 3, 1990, p. 92.

(97)　マキャヴェリ著・永井三明訳，前掲書，286頁。

(98)　参照，前掲拙稿，47-48頁。

(99)　Cf., W. Förster, Thomas Hobbes und der Puritanismus : Grundlagen und Grundfragen seiner Staatslehre, Berlin, 1969, S. 127. なお，ウッドの履歴上の事柄については，次の文献を参照。N. Malcolm (ed.), The Correspondence of Thomas Hobbes, Vol. Ⅱ, Oxford, 1994, pp. 917-919. また，フェルスターは，ホッブズが，アテネ民主政下の代表的「雄弁家」，クレオンを「イングランド議会」に見立てていると指摘している。Cf., W. Förster, ibid., S. 132.

(100)　Cf., G. C. Robertson, Hobbes, Edinburgh, 1886, p. 24.

(101)　R. Schlatter, ibid., p. xxiii.

(102)　Cf., M. M. Reik, The Golden Lands of Thomas Hobbes, Detroit, 1977, pp. 36-37.

(103)　Cf., A. A. Rogow, Thomas Hobes : Radical in the Service of Reaction, London, 1986, p. 87.

(104)　R. A. Grover, ibid., p. 98.

(105)　N. Malcolm, Aspects of Hobbes, Oxford, 2002, p. 8.

(106)　R. E. R. Bunce, Thomas Hobbes, London, 2009, p. 5.

(107)　T. H. Miller, Mortal Gods : Science, Politics, and the Humanist Ambitions of Thomas Hobbes, Pennsylvania, 2011, p. 14.

(108)　O. L. Ⅰ, p. lxxxviii. 福鎌忠恕訳，同上，16頁。

(109)　E. W. Ⅷ, p. vi.

(110)　F. L. Bickley, The Cavendish Family, London, 1911, p. 36.

(111) Cf., N. Malcolm (ed.), The Correspondence of Thomas Hobbes, Vol. Ⅱ, Oxford, 1994, pp. 812-815.

(112) 初期ホッブズとベーコンの関わりについては，参照。前掲拙稿，48-49 頁。

(113) Cf., N. Malcolm (ed.), ibid., pp. 777-778., pp. 855-857. アグライオンビーは，ホッブズ宛ての書簡の中で，議会陣営の二大勢力であったピューリタンとコモン・ローヤーを「邪悪 wiked」であると手厳しく糾弾している。Cf., N. Malcolm (ed.), The Correspondence of Thomas Hobbes, Vol. Ⅰ, Oxford, p. 8.

(114) O. L. Dick (ed.), Aubrey's Brief Lives, Middlesex, 1949, pp. 229-230. 橋口稔・小池　銈訳『名士小伝』冨山房，1979，102 頁。

(115) 参照，福鎌忠恕訳，同上，32 頁。Cf. W. Hörster, ibid., S. 127.

(116) Cf. O. L. Dick (ed.), ibid., p. 253. 橋口　稔・小池　銈訳，前掲書，19 頁。

(117) Cf., F. Levy, ibid., p. 252.

(118) 英文学史においても，B. ジョンソンは，「王党派」あるいは「宮廷派」の文人であると理解されている。参照，橋口　稔編著『イギリス文学史』荒竹出版，1983 年，97 頁。川崎寿彦『イギリス文学史』成美堂，1988 年，50 頁。

(119) Cf., L. L. Peck, Constructing a New Context for Hobbes Studies, H. Nenner (ed.) Politics and the Political Imagination in Later Stuart Britain : Essayes Presented to Lois Green Schwoerer, New York, 1997, pp. 162・164.

(120) Cf., A. P. Martinich, Hobbes : A Biography, Cambridge, 1999, p. 59.

(121) Cf., E. W. Ⅷ, p. xvi.

(122) 参照，今井　宏「イングランド革命と国家の変容」『聖学院大学総合研究所紀要』第 22 号，2001 年，37-38 頁。

(123) Cf., N. Malcolm, Reason of State, Propaganda, and the Thirty Year's War, p. 77. Cf., S. Adams, Foreign Policy in the Parliaments of 1621 and 1624, K. Sharpe (ed.), Faction and Parliaments : Essays in Early Stuart History, Oxford, 1978, p. 144.

(124) N. Malcolm, Ibid., p. 90.

(125) Ibid., p. 85.

(126) Ibid., p. 91.

(127) Cf., N. Malcolm, Aspects of Hobbes, p. pp. 54-55. N. Malcolm, Reason of State, Propaganda, and the Thirty Years' War, p. 78.

(128) 参照，前掲拙稿，36-37 頁。

(129)　山内　進『新ストア主義の国家哲学－ユストゥス・リプシウスと初期近代ヨーロッパ』千倉書房，1985 年，223 頁。

(130)　参照，須藤祐孝「政治の発見－マキャヴェッリにおける作為の論理－」『思想』No. 535，1969 年，77 頁。

(131)　参照，佐々木　毅『マキアヴェッリ：人類の知的遺産（24)』講談社，1978 年，29 頁。

(132)　参照，笹倉秀夫「マキャヴェリ再考（1）－＜軍事論と政治論＞の視点から－」『法学雑誌（大阪市立大学)』第 41 巻第 2 号，1994 年，155 頁。同上（3)，第 42 巻第 1 号，1995 年，78 頁。なお，笹倉は，マキャヴェリの共和主義思想の成立根拠をこの点に求めている。さらに，その点に関連して，ブルクハルトが，夙に早く，1860 年に著したルネサンス研究の古典，『イタリア・ルネサンスの文化　一試論』の中で，マキャヴェリが『政略論』において「中庸を得た一種の民主政体」としての「共和国」の構想を提示していることは，「きわめて興味のあることである」と指摘している点を付記しておきたい。柴田治三郎編『ブルクハルト：世界の名著（45)』中央公論社，1966 年，151 頁。

(133)　参照，佐々木毅『主権・抵抗権・寛容－ジャン・ボダンの国家哲学－』岩波書店，1973 年，76 頁。

(134)　若林　明「ベイコンの倫理思想」花田圭介編『フランシス・ベイコン研究』お茶の水書房，1993 年，193 頁。

(135)　Cf.，M. M. Reik，ibid.，p. 40.

(136)　Q. Skinner，Hobbes and Republican Liberty，pp. 13-14.

(137)　Cf.，N. Malcolm，The Correspondence of Thomas Hobbes，Vol. 1，Oxford，p. 19.

(138)　参照，福鎌忠恕，同上，32-33 頁。Cf.，K. Schuhmann，ibid. p. 43.

(139)　佐々木力「リヴァイアサン，あるいは機械論的自然像の政治哲学」『近代学問理念の誕生』岩波書店，1992 年，149-150 頁。

(140)　佐々木力『科学革命の歴史構造（上)』岩波書店，1985 年，177 頁。

(141)　ホッブズは晩年の自叙伝の中で，メルセンヌとの出会いについて，次の様に書いている。「コノ地（パリ－筆者）ニテ我ハめるせんぬヲ識リ，彼ニ事物ノ運動ニツキワガ瞑想シタルトコロヲ伝ウ。彼ワガ説ヲ善シトシ，多クニ薦ム。」（T. Hobbes Malmesburiensis Vita・・・，O. L. I，p. xc. 福鎌忠恕訳，同上，18 頁）

(142)　Ibid.，p. lxxxix. 福鎌忠恕訳，同上，17 頁。

(143)　ホッブズは「自叙伝」の中で，次の様に述べている。「多様ナ運動ヨリ発シテ我ハ多様ナ事物ノ異ナレル種類ト物質ノ仕組ミヘト向イ，人間ノ内部的運動ト心ノ隠レ家ヘ

（傍点は筆者），最後ニハ国権ト正義ノ恩恵ニマデ筆ヲ及ボス。コレラノ研究ニ我ハ沈潜セリ，ソノユエハ，物体，人間，市民ガ哲学ノ全種属ヲ包括スレバナリ。コレラニ関シ三冊ノ書物ヲ著ワサント決意シ，我ハ素材ヲ日毎ニ手モトニ集積ス。」（Ibid., p. xc. 福鎌忠恕訳，同上，18 頁）

（144） ここでホッブズの著作か否かに関して議論が続いている「第一諸原理についての小論 A Short Tract on First Principles」についてその顛末を簡潔に紹介しておきたい。藤原保信によると，この論説は，テンニースがデヴォンシャー家が保持する手稿群の中から，ホッブズの手になる 1630 年頃の作品と特定し，1889 年に刊行した『法学要綱 The Elemennts of Law』の付録として公刊した。そして，この論説の中には，ホッブズにおける「アリストテレス・トマス的な目的論的自然観から近代的な機械論的自然観への転換」，延いては「アリストテレス・トマス的な貴族主義的・倫理的人間観から自然主義的人間観への転換」が表明されている。参照，藤原保信『近代政治哲学の形成－ホッブズの政治哲学－』早稲田大学出版部，1974 年，332-349 頁。テンニースの断定以来，この論説は，藤原も含めて，ホッブズの著作として扱われてきた。と言うことになると，ホッブズは『戦史』翻訳書の刊行と踵を接して，1630 年代の冒頭の時期から力学的運動論の世界に親しみ，その素養を獲得していたことになる。そして，本稿でしばしば言及してきた，「ニューカスル候への献辞」における自然法観や情念観の見地に達していたことになる。しかし，1988 年になって，タックはこの手稿がホッブズではなく，キャヴェンディッシュ家と親交のあったペイン Robert Payne が書いたものであるとテンニース説に対して，異議を申し立てた。Cf. R. Tuck, Hobbes and Descartes, G. A. J. Rogers and A. Ryan（eds.）, Perspectives on Thomas Hobbes, Oxford, 1988, pp. 11-41. タックの異議申し立て以来，この論説の著者をめぐる「大論争」（N. Malcolm, Aspects of Hobbes, p. 104.）が続いている。その経緯については，マルカムのこの書物の 104 頁以下を参照。そして，マルカムは本書の 81-139 頁でタック説を支持する長大且つ，詳細な議論を展開している。ちなみに，日本では，佐々木力がタックに依拠してテンニース説に懐疑的姿勢を示している。確かに佐々木の言うように，今の段階では，「『小論』をホッブズ当人のものとして疑いないとすることには危険が伴う」（佐々木力，『近代学問理念の誕生』，151 頁）と言えよう。但し，仮にそうであるとしても，ホッブズとペインの間には交流があったので，ホッブズが自然科学思想に親しむ上で，何らかの形でペインが重要な役割を果たしたことは間違いない。Cf., N. Malcolm, The Correspondence of Thomas Hobbes, Vol. Ⅱ, Oxford, 1994, pp. 873-874.

（145） E. W. Ⅷ, p. xxix.
（146） Ibid., p. xxix.
（147） Ibid., p. xxviii.
（148） G. C. Robertson, ibid., p. 57
（149） 参照，前掲拙稿，37頁。最近刊行された，トマス・ホッブズ著，伊藤宏之・渡部秀和訳『哲学原論／自然法および国家法の原理』（柏書房，2012年）においては，「ニューカスル伯への献辞」の該当部分が次の様に訳されている。「この原理を理性の規則と不可謬性に整復するのには，最初に，怪しまれず置き換えることのできない情念に基礎を定めることの他には道はないのです。そしてその後で，その上に自然法における事柄の真実を（これまでは不安定に作られてきましたので）次第に全体が論破できないほどに立ち上げるのです。」（1133頁）私訳は，多少ニュアンスが異なるが，私としては，この文章はホッブズが，1629年までの思想活動の反省に立ち，1630年代の研鑽も踏まえて，新しい思想活動の門出を宣言したものと考える。私はこの点に配慮して私訳を試みた次第である。また，この点に関して，前掲拙稿，75-76頁の脚注（6）も参照。
（150） ここで後期ホッブズの代表的著作とされて来た『リヴァイアサン』の中から，自然法に関する説明を，二箇所，取り出してみたい。ホッブズは自然の法と主権者の法は，「たがいに他をふくみ，ひとしい範囲のものである」（E. W. Ⅲ, p. 253. 水田　洋訳『リヴァイアサン（二)』岩波書店，1964年，166頁）とする前提に立って，次のように述べている。「法・・・の効用は，人民をすべての意志的行為をしないように拘束することではなくて，かれらを，自分たちの無茶な欲求や性急さや無分別によってみずからきずつけないような運動の範囲に，みちびき保持するすることにある。それはちょうど，垣根が，旅人をとめる（傍点は筆者）ためにではなく，道をあるきつずけさせるためにもうけられるのとおなじである。」（Ibid., p. 335. 水田　洋訳，同上書，274頁）「主権者の*職務*は，・・・人民の安全 the safety of the people の達成であって・・・ここで安全というのは，生命のたんなる維持 a bare preservation ではなくて，各人が，コモン－ウェルスに危険や害を与えない合法的な勤労によって自己のものとして獲得する，生命のその他のすべての満足 all other contentments（傍点は筆者）をも意味するのである。」（Ibid., p. 322. 水田　洋訳，同上書，259頁）これらの引用文に見られる様に，後期ホッブズが導出した新自然法は，必ずしも，人間社会における情念世界の完全消滅を求めるものではなく，人間相互間の情念の並立・均衡を要請するものであった。初期時代に生まれた峻厳な人間認識は，『リヴァイアサン』の段階の自然法思想の内容にも刻印を刻んでいると言える。また，ホッブズにとって，自然法思想は，人間が

目標とすべき理想世界の構想であるが，同時にそれは，人間が到達し得る理想世界の限界をも提示するものであったのである。

(151)　ここで，『リヴァイアサン』の表現を借りると，「思索における真理を，じっさいにおける効用にてんじる」(E. W. Ⅲ, p. 358. 水田　洋訳『リヴァイアサン（2)』岩波書店，1964 年，303 頁）ための作業が要請されることになると思う。

(附録)　初期ホッブズ研究文献目録

初期ホッブズ（1588-1629 年）に関する専論を収めている書物，雑誌の類に載っている専論文献，並びに初期ホッブズに関する論及を含む文献を挙げる。三番目のものに関しては，主要なものだけに限った。

(1)　Bagby, L. M. J., Thomas Hobbes : Turning Point for Honor, New York, 2009.

(2)　Bickley, F., The Cavendish Family, London, 1911.

(3)　Borelli, G., Evidenza, veritàe storia : Hobbes interprete di Tucidide, Introduzione a “La Guerra del Peloponneso“di Tucidide, Napoli, 1984.

(4)　Borot, L., History in Hobbes's thought, Sorell T. (ed.), The Cambridge Companion to Hobbes, New York, 1996.

(5)　Brown, C. W., Thucydides, Hobbes and the Linear Causal Perspective, History of Political Thought, Vol. x, No. 2, 1989.

(6)　Bunce, R. E. R., Thomas Hobbes' relationship with F. Bacon-an Introduction, Hobbes Studies, No. 16, 2003.

(7)　Thomas Hobbes, New York, 2009.

(8)　Bush, D., “Horae Subsecivae”, The Times Literary Supplement, Saturday, July31, 1943.

(9)　Hobbes, William Cavendish, and “Eassayes”, Notes and Queries, May 1973.

(10)　Butler, T., Image, Rhetoric, and Politics in the early Thomas Hobbes, Journal of History of Ideas, Vol. 67, No. 3, 2006.

(11)　Coli, D., 《Three discourses》 di Thomas Hobbes, Rivista di Filosofia, 89, no. 2, 1998.

(12)　Dick, O. L. (ed.), Aubrey's Brief Lives, New York, 1949.（橋口　稔・小池　銈訳

『名士小伝』冨山房，1979 年）
(13) Förster, W., Thomas Hobbes und der Puritanismus, : Grundlagen und Grundfragen seiner Staatslehre, Berlin, 1969.
(14) Fortier, J. C., Hobbes and ‘A Discourse of Laws’ : The Perils of Wordprint Analisis, The Review of Politics, Vol. 59, No. 4, 1997.
(15) Last Word, ibid.
(16) Gabrieli, V., Bacone, la Riforma e Roma nella versione hobbesiana d'un carteggio di Fulgenzio Micanzio, The English Miscellany, No. 8. 1957.
(17) Glover, R. A., Individualism, Absolutism and Contract in Thomas Hobbes' Political Theory, Hobbes Studies, No. 3, 1990.
(18) Gray, R., Hobbes' System and His Early Philosophical Views, Journal of the History of Ideas, Vol. 39, No. 2, 1978.
(19) Grene, D., Introduction, Thucydides : The Peroponnesian War, The Complete Hobbes Translation, Chicago, 1989.
(20) Hamilton, J. J., Hobbes's Study and the Hardwick Library, Journal of the History of Philosophy, Vol. 16, No. 4, 1978.
(21) Hilton, J. L., Reynolds, N. B. and Saxonhouse, A. W., Hobbes and ‘A Discourse of Laws’ : Response to Fortier, Review of Politics, Vol. 59, No, 4, 1997.
(22) Hinnant, C., Thomas Hobbes, Boston, 1977.
(23) Hoekstra, K., The End of Philosophy（The Case of Hobbes）, Proceedings of the Aristotelian Society, No. 106, 2006.
(24) Houten, A. V., Prudence in Hobbes's Political Philosophy, History of Political Thought, Vol. 23, No. 2, 2002.
(25) 福鎌忠恕「トーマス・ホッブズ著『ラテン詩自叙伝』－ワガ生涯ハワガ著作ト背馳セズ－」『東洋大学大学院紀要』第 18 集，1982 年。
(26) Huxley, A., The Aphorism and A Discourse of Laws : Bacon, Cavendish, and Hobbes, 1615 – 1620, Historical Journal, No. 47, 2004.
(27) 藤原保信『近代政治哲学の形成－ホッブズの政治哲学－』早稲田大学出版，1974 年。
(28) Johnson, L. M., Thucydides, Hobbes, and the Interpretation of Realism, Dekalb, Illinois, 1993.
(29) Johnston, D., The Rhetoric of Leviathan : Thomas Hobbes and the Politics of Cultural Transformation, Princeton, 1986.

(30)　加藤喜代志「チャッツワース図書館訪問雑記（1）・(2)」『こだま（金沢大学附属図書館報)』第76号，1984年。

(31)　清末尊大「写本『随筆集』と刊本『閑暇』がホッブズの著作ではないことの証明」『北海道教育大学紀要（第一部B)』第42巻第2号，1992年。

(32)　Kraynak, R. P., History and Modernity in the Thought of Thomas Hobbes, Ithaca, 1990.

(33)　Speculations on the Earliest Writings of Hobbes, The Review of Politics, Fall, 1996.

(34)　Laird, J., Hobbes, London, 1934.

(35)　Lessay, F., Thomas Hobbes : Textes sur l'hérésie et sur l'histoire, Paris, 1993.

(36)　Levy, F., The Background of Hobbes's Behemoth, Kelley, D. R. and Sacks, D. H. (ed.), The historical imagination in early modern Britain-History, rhetoric, and fiction, 1500-1800, Cambridge, 1997.

(37)　Lund, W. R., The use and abuse of the past : Hobbes on the study of history, Hobbes Studies, Vol. 5, 1992.

(38)　Malcolm, N., De Dominis (1560-1624) : Venetian, Anglican, Ecumenist and Relapsed Heretic, London, 1984.

(39)　Aspects of Hobbes, Oxford, 2002.

(40)　Reason of State, Propaganda, and the Thirty Years' War : An Unknown Translation by Thomas Hobbes, Oxford, 2007.

(41)　Martinich, A. P., Peloponesian War by Thucydides, A Hobbes Dictionary, Cambridge, 1995.

(42)　Francis Andrewes's Account of Thomas Hobbes's Trip to the Peak, Notes and Queries, December 1998.

(43)　Hobbes : A Biography, Cambridge, 1999.

(44)　Miller, T. H., Mortal Gods : Science, Politics, and the Humanist Ambitions of Thomas Hobbes, Pennsylvania, 2011.

(45)　Norbrook, D., Lucan, May and Republican Literary Culture, K. Sharpe and P. Lake (ed.), Culture and Politics in Early Stuart England, London, 1994.

(46)　O'Brien, E. J. H., "Horae subsecivae 1620", Notes and Queries, 10th ser., 12, 1909.

(47) Overhoff, J., Hobbes's Theory of the Will : Ideological Reasons and Historical Circumstances, Oxford, 2000.
(48) Pacchi, A., Una "biblioteca ideale" di Thomas Hobbes : il MS E 2 dell' archivio di Chatsworth, Acme, 21, 1968.
(49) Pagallo, U., Bacon, Hobbes and the Aphorisms at Chatsworth House, Hobbes Studies, No. 9, 1996.
(50) Paganini, G., Thomas Hobbes e Lorenzo Valla : Critica Umanistica e filosofia moderna, Rinascimento, No. 39, 1999.
(51) Peck, L. L., Hobbes on the Grand Tour : Paris, Venis, or London ?, Journal of the History of Ideas, Vol. 57, No. 1, 1996.
(52) Constructing a New Context for Hobbes Studies, Nenner, H., (ed.), Politics and the Political Imagination in Later Stuart Britain : Essays Presented to Lois Green Schwoerer, New York, 1997.
(53) Reik, M. M., The Golden Lands of Thomas Hobbes, Detroit, 1977.
(54) Reynolds, N. B., Statiscal Wordprinting, Reynolds, N. B. and Saxonhouse, A. W. (eds.), Thomas Hobbes : Three Discourses : A critical Modern Edition of Newly Identified Work of the Young Hobbes, Chicago, 1995.
(55) Reynolds, N. B. and Hilton, J. L., Statiscal Wordprint Analisis Identifies New Hobbes Essays, International Hobbes Association Newsletter, n. s. 14, 1992.
(56) Hobbes and Authorship of the Horae Subsecivae, History of Political Thought, Vol. 14, No. 3, 1993.
(57) Reynolds, N. B. and Saxonhouse, A. W., Hobbes and the Horae Subsecivae, Reynolds N. B. and Saxonhouse, A. W. (eds.), ibid.
(58) Robertson, G. C., Hobbes, Edinburgh, 1886.
(59) Rogow, A. A., Thomas Hobbes : Radical in the Service of Reaction, New York, 1986. 岡部悟朗「アーノルド・A・ロゴー『トマス・ホッブズ』（1）・（2）・（3）」『鹿児島大学法学論集』第28巻第2号，第29巻第1・2合併号，第33巻第1号，1993・1994・1998.
(60) Rossini, G., The Criticism of Rhetorical Historiography and the Ideal of Scientific Method : History and Science in the Political Language of Thomas

Hobbes, Pagden, A. (ed.), The Language of Political Theory in Early Modern Europe, Cambridge, 1987.

(61) Roux, L., Thomas Hobbes : penseur deux mondes, Paris, 1981.

(62) Sarasohn, L. T., Thomas Hobbes and the Duke of Newcastle : A Study in the Mutuality of Patronage before the Establishment of the Royal Society, Isis, Vol. 90, No. 4, 1999.

(63) Was Leviathan a Patronage Artifact ?, History of Political Thought, Vol. 21, No. 4., 2000.

(64) 佐藤正志「歴史における真理と修辞－初期ホッブズにおける方法の問題－」，渋谷　浩編著『啓蒙政治思想の形成－近代思想の研究（1）－』成文堂，1984年。

(65) Saxonhouse, A. W., The Origins of Hobbes' Pre-Scientific Thought : An Interpretation of the Horae Subsecivae, Yale University, Ph. D., 1972.

(66) Hobbes and the Horae Subsecivae, Polity, Vol. 13, 1981.

(67) Hobbes and Modern Political Thought, Reynolds, N. B. and Saxonhouse, A. W. (eds.), ibid.

(68) Schlatter, R., Thomas Hobbes and Thucydudes, Journal of the History of Ideas, No. 6, 1945.

(69) Hobbes's Thucydides, New Brunswick, 1975.

(70) Schumann, K., Hobbes and Renaissance Philosophy, Napoli, A. (ed.), Hobbes Oggi, Milan, 1990.

(71) Hobbes : une chronique : Cheminement de sa pensée et de sa vie, Paris, 1998.

(72) Short, M. L., Thomas Hobbes : An Education fit for a King, Athen, 1981.

(73) Silver, V., Hobbes on Rhetoric, T. Sorrel (ed.), ibid.

(74) Skinner, Q., 'Scientia Civilis' in classical rhetoric and in the Early Hobbes, Phillipson, N and Skinner, Q. (eds), Political Discourse in Early Modern Britain, Cambridge, 1996.

(75) Reason and Rhetoric in the Philosophy of Hobbes, Cambridge, 1996.

(76) Visions of Politics, Vol. Ⅲ, Cambridge, 2002.

(77) Hobbes and Republican Liberty, Cambridge, 2008.

(78) Slomp, G., Thomas Hobbes and the Political Philosophy of Glory, New York,

2000.

(79) Sommerville, J. P., Thomas Hobbes : Political Ideas in Historical Context, London, 1992.

(80) Stephen, L., Hobbes, London, 1904.

(81) Strauss, L., The Political Philosophy of Thomas hobbes, Its Basis and Its Genesis, Oxford, 1936.（Hobbes, T., Politische Wissenschaft, Luchterhand, 1965, 添谷育志・谷　喬夫・飯島昇藏訳『ホッブズの政治学』みすず書房，1990 年）

(82) 高野清弘『トマス・ホッブズの政治思想』お茶の水書房，1990 年。

(83) 田中　浩『ホッブズ』研究社出版，1998 年。

(84) 田中秀夫「ホッブズ社会哲学形成史における『歴史』の意味－ホッブズ社会哲学の形成過程（１）」，『経済論叢（京都大学)』第 117 巻第５・６号，1976 年。

(85) 「ホッブズの初期論説『トゥキュディデースの生涯と歴史』について－ホッブズ社会哲学の成立過程（２）」，『経済論叢（京都大学)』第 119 巻第４・５号，1978 年。

(86) Terrel, J., Hobbes － vies d' un philosophe －, Rennes, 2008.

(87) Richard Blackburne : Supplément à la Vie de Hobbes（Traduit du Latin par Jean Terrel）, ibid.

(88) Tönnies, F., Hobbes : Leben und Lehre, Stuttgart, 1925.

(89) Lettres inedites, Archives de philosophie, Vol. xii, cahier ii, 1936.

(90) Studien zur Philosophy und Gesellschaftlehre im 17. Jahrhundert, herausgegeben von Jacoby, E. G., Stuttgart, 1975.

(91) Tuck, R., Hobbes, Oxford, 1989.（田中　浩・重森臣広訳『トマス・ホッブズ』未来社，1995 年。）

(92) Hobbes and Tacitus, Rogers, G. A. J. and Sorell T.（eds.）, Hobbes and History, London, 2000.

(93) Turberville, A. S., A History of Welbeck Abbey and its Owners, Vol. I, London, 1938.

(94) Warner, R. and Finley, M. I., History of the Peloponnesian War : Thucydides, Harmondsworth, 1954.

(95) 梅田百合香『ホッブズ　政治と宗教』名古屋大学出版会，2005 年。

(96) Watkins, J. W. N., Hobbes's System of Ideas : A Study in the Political Significance

of Philosophical Theories, (Second edition), London, 1973. 田中浩・高野清弘訳『ホッブズ－その思想体系－』未来社，1988 年。

(97) Wolf, F. O., Die neue Wissenschaft des Thomas Hobbes：Zu den Grundlagen der politischen Philosophie der Neuzeit, Stuttgart, 1969.

(98) Zum Ursprung der politischen Philosophy des Hobbes：Hobbes Konzeption der "politisch － klugen geschichtsschreibung" in den "Essayes addressed to his Father, by William Cavendish" von 1615-1620, Koselleck, R. und Schnur, R. (hrsg.), Hobbes Forschungen, Berlin, 1969.

(99) Wootton, W., Thomas Hobbes's Machiavellian moments, Cambrige, 1997, Kelly, D. R. and Sacks, D. H. (eds), ibid.

(100) 山口正樹「歴史の政治学－ホッブズとヴィーコにおける科学と歴史－」『早稲田政治公法研究』第 68 号，2001 年。

(101) 山田園子（解説・翻訳)「トマス・ホッブズ『トゥキューディデースの生涯と歴史』（上・下)」『広島法学』第 31 巻第 2・3 号，2007・2008 年。

(102) 山本隆基「"Horae subsecivae" と "Essayes" －初期ホッブズの原資料に関するノート」『福岡大学法学論叢』第 41 巻第 2 号，1996 年。

(103) 「初期ホッブズの思想－自然法と政治的歴史－（１)・(２・完)」『福岡大学法学論叢』第 41 巻第 3・4 号，第 43 巻第 1 号，1997 年・1998 年。

(104) 「トマス・ホッブズの初期政治思想－自然法・情念・国家－ (1)・(2・完)」『福岡大学法学論叢』第 57 巻第 1 号，第 57 巻第 3 号，2012 年。

(105) Zagorin, P., Hobbes and The Law of Nature, Princeton, 2009.